

發端

座本豊竹越前少掾

遙々爰に紀の路なるく、牟婁の郡に著きにけり。抑是は熊野權現に、三山百度の大願を立てし、蓮花王坊と申す沙門にて候。我釋門に入りてより以來、多年三所の妙驗を仰いで、此度既に百度の大願、九十九度に相満てり。誠に妙なる御山の修行、今一度にして願望を満てん事、行者たる身の悦びと、樂しみ登る山竝に、かよるや雲の峯つゞき、岨を傳へば跡よりも、よばふを聞けば谷川の、流につれて遠近に、音する方を眺むれば、ふしぎや川邊に立ちならびし、柳の一本の動く見えしが、忽人體の形を顯はし、「いかにやいかにや蓮花王坊。我こそ此山谷に生出でし、柳と柳の精靈なり。非情の類なりといへども、天成夫婦婚姻の契を籠めて枝を交へ、自然と連理のかたらひをなす。然るに御身修行の始、此谷川を行場と定め、折から柳と柳の連理を見付け、是夫婦交合の有様、行場の穢と枝を切る。夫より夫婦二木と成り、連理の契りは空しくなる。されども不斷有りがたき、御法を聞

きし其功力、此身は非情の果を逃れ、今人界に生を受くる。又一木の柳は是女身を受けし縁によつて、互の中をさかれし恨、長く非情の果を離れず、一念仇を報ふべし。よくく慎しみ登山有れ。我人界に生ずるも、法味を受けし恩有れば、告けしらしむ」といふ聲ばかり、形は消えて心中の、魂と顯れ大空に飛去りしこそふしぎなれ。此魂則中有に留つて、常陸の國の片邊に、横曾根の平太郎と生るとかや。闇然として王坊は、奇異の思ひをなしるたる。誠や女身を受けたりし、柳の見入強かりけん、今の奇特を見るからに、王坊たちまちまんしん忽慢心起つて、「扱々ふしぎや。正しくも非情の柳の木人と成り、斯まで詞をかはす事、法の力と云ひながら、多年の功力に寄らずんば、いかでかかゝる奇瑞を見ん。凡山修行の人幾萬人か有るべきが、九十九度まで恙なく、難行せしは我ばかり、適身に在つて譽や」と、獨笑して居たりける。時に山鳴り震動して、其さま異形の客僧、忽然と顯れ出で、「ヤア穢はしや王坊、非情の精を化度しつるを、我行徳と思ふ慢心、いまはしや勿體なや。さばかり垢穢たる惡念にて、此山上は叶ふまじ、急いで下山致すべし」と、はつたと睨む眼

の光は、輝渡つて恐ろしよ。されども王坊、魔性の心入りかはれば、ちつとも疑儀せず、
「コハいかに、御身誰人なればさはいふぞ。我受戒灌頂せしより以來、六塵の境を去つて、
六根清淨と聖切つたる此行者、百度の荒行を勤めし我が心を、穢れたるとは、イヤハヤ過言
千萬」と、信ずる氣色あらばこそ。客僧いかつて「儕ぜひく出づまじきか。イデ思ひしら
せん」といふより早く飛びかより、引摺んで投げれば、さばかり深き谷底へ、眞倒に落つる
と見えしが、柳の梢に貫かれ、骸は朱に死したりし、劍樹地獄は目の前なり。是一念の慢
心より、天魔破旬の心にかはり、願望空しく果せしは、恐るべしく。されど日頃の行徳に
や、王坊の戸より、瑤々たる一つの玉、悽愴として虚空に入れば、是も流轉に出生す。後
三條院第一の皇子、白川の法皇こそ、彼蓮花王坊が再來たり。代かはり既に星移りて、娑
婆往來の物語、昔々は斯くとなん。

三十三間堂
平太郎縁起

祇園女御九重錦

枝葉美なる物は根莖を害ひ、世に至き事兩なしと、云ひ傳へたる語のごとく、人は萬物の靈として、忠讒賢否交起り、草木非情の産として、統て徳化の風に靡き、治る時津秋津國、鳥羽の院の御宇にあたつて、萬機の糸も白川の、法皇と申し奉るは、聖徳いみじき仙洞なり。此君御願の旨有つて、祇園大社に參籠ある、賽の車道、警蹕正しく御車先、時の攝政右大臣師實公、殿には太宰帥藤原朝臣季仲、押しさがつて北面の守護武者所時澄、各衣冠爰然と、供奉の官人仕丁まで、位爭ふ下馬石も、おのれと跼む威勢なり。かよる所へ鳥居前、「奏聞、奏聞」と呼はつて、立ち出で來たるは備前守平忠盛、跡に續いて譜代の執權、進藏人家貞、大の男を高手小手、いましめ厳しく、引居ゆれば、攝政師實いぶかり給ひ、「コハ心得ざる振廻かな、様子いかに」と有りければ、忠盛兩袖刷ひ、「さん候、其曲者昨夜社内に忍び入り、神殿近く狙ひ寄る形相尋常ならざれば、某生捕り候」と、事もなけなる演説に、師實大さに驚き

給ひ、「見れば怪しき沙門の立、面を改め仔細を問へ、ハレ藏人」とのたまへば、はつと答へて立ちかより、麥藁笠を引たくれば、内匠頭源義親なり。ヤアこはそもいかなるはからひと、攝政始め竝居る人々、呆れ果てたるばかりなり。始終呑み込む武者所、太宰帥と顔見合せ、工の臍の合はぬ同士、手持無沙汰に義親の、繩ときほどけば師實公、御聲高く、「ヤアいかに義親、法皇當社に參籠有る事、京童も能く知つたり。然るに怪しき僧形にて、神殿ちかく窺ひ寄る、心底甚いぶかし」と、問はせ給へば嘲笑ひ、「コハをこがましき御察度、某かゝる立は、君を守護するかけの奉公。尤忠盛進藏人、宿直致すと聞きつれども、夜の間の油斷覺束なく、皇居を守る我が忠節、夫ともしらぬ不覺の忠盛、わざと繩目にかゝつたを、手柄顔なる言上は片腹いたし」と嘲つて、よわみを見せぬ減らず口。「ヤア過言なり義親、誠我君を守護する身が、何故我に眞劍の、勝負有りしは心得ず」と、のつぴきならぬ詞の先、季仲引取り、「イヤこれ忠盛、君を守護する身の要害、刃物帶せで濟むべきか。何角とおいやる貴公でも、ソレ其通り腰刀、さすが武門に産れても、手前の見えぬ猪武者」と、罵る中に進藏人、たまりかねてつとと出で、「コハ季仲の御意とも覺えず、主人の太刀と義親の刃物を一所に論ずるは、事愚なる眼力」と、詞の釘を折返せば、脇よりぬつと武者所、「ヤアちよこざいな指出口、こま言いはず

つこんで、似合うた様に御車の、牛の番せよ藏人」と、いはせも果てず、「シャ奇怪、其臆切つて切りさけん」と、つゝ立上る家貞を、「ヤレ早まるな」と忠盛卿、制し止めてこなたに向ひ、「イヤナウ義親、とつくと聞かれよ。某帶する此太刀は、君を守護する誠の太刀、又貴殿の打物は、上を恐れぬ真劔なれば、芋がら荊も同然」と、嘲弄あれば怒をまし、「ヤア得手勝手聞きにくい。此義親が一腰は、武士たる者の魂なるを、芋莖などとさみするは、聞捨てがたし」と詰寄れば、忠盛につこと打笑ひ、「成程刃物は武士の魂、然りといへども、一天の君を守護する魂は、まづ此通り」と拔放すは、真劔ならぬ木刀一振、追取直して詞を重ね、「此木刀を帶せしは、過ぎし節會の折からより、忠義一途の刃金を鍊ひ、物其數にはあらがねの、刃を頼まぬ我魂、よく見られよ」と指し付くる、木刀一本さしもの義親、何と返答口ごもる。太宰帥はさし心得、「イヤサ忠盛、廣言置かれい。夫程立派な魂持ち、コレ此扇」と取出し、「是に書きたる戀歌の取やり、察する所官女の内、不義働いてお樂み、スリヤ徒も軍用に立ち申すか」と押開く、扇の面は覚えの手跡、木石ならぬ忠盛が、心の外の戀歌の手詰、はつとばかりに、さしうつむき、誤り入つたる風情なり。折しも車の御玉簾、さつとかゝけて白川の法皇、祇園女御と諸共に、玉座列なる綾錦、さも貴なる粧に、諸卿も式禮厚額、笏を正して尊敬有る。法皇振た

る御聲にて、「今聞く所の詞争ひ、互に越度は有りながら、さして咎むる譯ならず、或夜是なる女御が袖、引くは矢竹の武士と、見留め置きたる其様子、女御委しく物語れ」と、仰の内に薄紅粉の、恥ぢてもみでる緋の袴、「コレ申し忠盛殿、其夜袖つま引き給ふは、よし有る人と見受けしかば、燈の油煙檜扇に、うつし取つたるかどり地に、楊枝の先の石指を、思ひ付きたる歌一首、御手にあらば其由を、あかして誠武士の、身の潔白を見せ給へ」と、事を分けたる女御の仰、忠盛具に領掌有り、「斯く顯はれし上からは、何をか包み申すべき。其折給はる歌の返し、有り合ふ扇に書き認め、奥に相圖の鈴の緒に、結び付けたる心の迷ひ、直に餘人の手に入りしは、是忠盛が身の誠。幸ひ君の檜扇は、折から懷中致せり」と、指出す扇師實公、取つて捧げる車の内、法皇つくぐ歡覽有り、「覺束な、誰が杣山の人ぞとよ、このくれに引く、主を知らずや」と、吟じ給へば太宰帥、折こそよしと進出で、持ちたる扇取り直し、「雲間より、たどもれきぬる月なれば、おほろけにてはいはじとぞ思ふ。サア此上は不義明白、不所存者の平忠盛、きつと糺明遊ばせよ」と、扇さし上げ奏すれば、法皇肯んじ給はずして、「いやとよさにあらず、忠盛が手ずさみは、我敷嶋の道に入る、心やさしき扇の面、神祇釋教戀無常、皆これ歌の種なれば、沙門の身にて思ふ戀、忍ぶ戀路を詠む習ひ。忠盛戀歌を詠んだりとて、不

義と咎むる事なけれ。又義親が帶劔も、武士たる者の身の守。是も野心と思はれず。只此上は先
非を捨て、更に忠なる心を合せ、都の政務肝要ぞや。朕がかねぐ三熊野の、大權現を信ずれ
ば、車を運ばん其爲に、則當社へ御暇の、法救をさよけ通夜をなし、是より熊野へ赴けば、道
の警固は忠盛時澄、洛中守護は内匠頭。必怠る事なけれ」と、仰も翠簾もやすらかに、事を納
むる勅、皆々渴仰嚴に、立上つたる太宰帥、時澄諸共義親も、麥藁笠に邪を、覆ひ隠して
墨衣、すまぬ詮議も方寸の、胸にからむる智仁勇、平忠盛藏人も、禮儀亂さず立茂る、神の園
生に善惡の、道明らけき攝政補佐、懷け治まる君が代の、例を爰にみ輦、引わかれてぞ、大
三重行雲の、前の世の、契りを爰に三熊野の、谷の岸根に生ひ茂る、柳が本の休床、女主の作
姿、赤前垂の色にめで、後生善所は此茶屋の、端香に足を留伽羅の、かをりも細き柳腰、お柳
お柳と名も高し。爰へのかく出でくるは、小山の如き大の男、名は岩淵の和田四郎、山賊夜
盜の鵬眼、きよろ／＼そこら見廻して、「ナントお柳、けふは道者も多かつたで、えらう取れ
たで有らうの」と、腰打ちかくれば、「イ、エイナ、なんほ通りが繁うても、お足の溜る事では
ござんせぬ」「何ぢや、旅人の足を口合に、お足とはなまの事か。天窓數ばかりで、高の知れた
つまみ錢、そんなとろい事せうより、此鼻と妹脊のかたらひする氣はないか。大勢の百姓どもに

這こゝひ屈かまし、お家へ様の奥おく様のと敬うやはす。コリヤ命取め」としなだれかゝれば、「オ、なめ、そんな事は嫌きらひでござんす」「何なんぢや嫌きらひぢや。ハ、ハ、ハ。わしや好すぢやといふ女をたこはない。エ、娘むすめばかり大事だいじにかけ、螻うはに見入みられ、えらい目にがな、笑止せうしな事。互たがひに女をたこなし夫をうとなし、いつぞとは思おもうてゐた。コレ手付てつけはかうぢや」と抱付だづけば、うるさながらも上手じやうずもの者、「夫程このほど思おもうて下くださんを、何なんのいなとはいいな舟ふね、の二世も三世もかはらぬと、固かための盃はした上で」「ヤア、夫こゝろは近き比ひ忝はづかしい。ぢやが酒さけや肴さかなが」「有あるともく。爰こゝに待まちつて居ゐやしやんせ、つい拵こしらへてくるはいな」と、云捨いほりて庵いほりへつつと入り、「いかいおせよ、をとよひごんせ」と戸かどをひつしやり。「なむ三寶さんぼう取りおつた。につくい奴やつぢや、と睨にらんで見たみたがこつちが悪い。此山このさん中にたつた獨暮ひとりぐして居ゐる大膽だいたん女郎ぢやうらう、あら立てだてはいかぬ筈はず、爰こゝらが戀こひの辛抱しんぼうぢや」と、立ちすくばつた虫腹むしはらの、てつぺい押おへる折せも折せ、「岩淵いわふちそれにお居ゐやるか」と、間近まぢかく來きるは武者むしや所時ところとき濟すけ、鼻はなと鼻はなとを突つ合せ、「何事なんじも先達ききだつて申まを合せし通とほり、法皇ほうわうを擒とりこにし、祇園ぎゐん女御にようぎを奪うばひ取り、太宰たさい帥し季仲きちゆう卿けいの戀こひを叶かなへる手段しゆだんといふも、第一だいいちは忠盛ちゆうせいから仕舞しまうて取とらでは何かの邪魔じゃま、随分ずいぶん油斷ゆだんなき様ようにと、コレ季仲きちゆうより頼たのの印しるし、五十兩ごじうりやう受取うけとれよ」と手に渡わたせば、押戴おしだいて、「何が扱あつ、某かも鹿島かしま三郎さぶらう義連よしつらといふ名なを包つみ、とくより都みやこを逐電ちくてんし、顔見うけん知らぬが幸究さいくつ竟やう。殊ことに身みが主人よしちか義親ぎしん、季仲殿きちゆうだんに同心どうしんのよし、

満足々々。軍用金用意の爲、かやうに形を略した幸、忠盛を討放し、女御を奪うて手に入れん。ちつとも氣づかひ候ふな」と、しめし合はする岨傳ひ、山踏分ける小鳥狩、鷹匠犬引列卒の者、大勢引連れ出来る、大宰帥季仲、其生付黒ければ、黒帥と異名に呼ばれ、髭の塵取る武者所、岩淵を引合せ、手を拱いて蹲まる。季仲桓々と見廻し、「和田四郎聞及ぶ早速の合體珍重々々。此度法皇が迎に登山せしが、陸路を下向といふにより、某は早歸洛の次手、小鳥を狩らせ遊覽せん爲、斯のごとく出立つたり。ヤア和田四郎、迎の船は新宮の濱に残し置く。女御を奪うてナ合點か」「ハア仰までも候はず、法皇下向に極れば、旁油斷なりがたし。手下の者に告知らせ、所々に待伏せん。心しづかに御歸京」と、追蹤たらぐ岩淵は、住家をさして立歸る。跡には季仲四方に眼を付け、見上ぐる峯の木の間より、夫としら鷺羽をのして飛來る風情、「アレ時澄、大鷹にかけさせよ」はつと拳を放すやいな、鷺を追つかけ追ひ廻し、何の苦もなく引摑み、飛歸らんとしたりしが、梢遙に亂れたる、柳が枝に足繩かより、羽たよきしたるその隙に、鷺は遁れて飛去つたり。季仲驚き、「あれを見よ、某が祕藏の薄雲、早々足繩切らずんば、暫時が間に狂死。ヤアく者ども、梢に登つて助けよ」と、いへどあせれど遙の梢、あれよくといふばかり、誰登らんといふ者なし。時澄いらつて、「云がひなし。所詮

柳を切倒し、鷹を助けるより外はなし。近邊をかけ廻り、杣を呼寄せ切崩せ」と、季仲諸共下知すれば、畏つて列卒の者、皆我先と走り行く。爰に常陸の國の片邊に、横曾根の平太郎當吉といふ者有り、先年父を不慮に討たれ、敵の有家知れざれば、熊野權現に祈誓を籠め、背には母を老の坂、孝行深き谷道の、岨を傳ひに來りしが、斯くと見るより、傍に母をおろし置き、季仲が傍近く、「道すがら聞きしに違はず、見申せば梢と云ひ、鷹の命も危ければ、心せきは御尤、併しかほどの大木、切り崩さんとの御計ひ、憚ながら殺生かと存する」と、いはせも立てず季仲、「ヤア何やつなれば無用の止立。生ある鷹を助けん爲、非情の柳を切取る事、殺生とは何を以て、ちよこざい千萬、退れやつ」と睨付ける。平太郎猶進み寄り、「されば、草木心なしとは申せども、花實春秋の時を違へず、陽春の徳を得て、南枝花始めて開くと申す。彼の釋尊の入滅には、叢林の諸木忽枯れし其例、其外飛梅老松いづれも心ある事は、人間にかはらねば、殺生と申したに僻言は候ふまじ。御家來の内射藝鍛鍊の方に仰せ、弓矢を以て足繩を射切らせ給はど、鳥も助かり、柳も恙なく候はん」と、事も無けにぞ申しける。「ハ、ハ、ハ。夫を儻に習はうや。恐らく養由比衛が拳は知らず、叶はぬ事及ばぬ事。すつ込め、退れ」と嘲る内、老母聞きかね進出で、「御家來の内射人がなくば、此勲御覽のごとく賤しき土民の手業ながら、常

に正氣を失うた」「ソレ／＼さうおつしやるが則氣違ひ」「アレまだいの」「サア／＼其氣違ひを直さん爲、夫故に本宮の、ナ、ハテ湯治に參つた。一廻りでは直らぬ筈、何事も私次第に。サアサア／＼必何もおつしやんな」と、刀を鞘に指寄つて、「とかく本性でないから、慮外の段は御宥免、お詫び申す」と手をつけば、「ム、いか様、目の内のきよろ付くは、氣違ひに極つた。必刃物を持たするな」と、時濟が納得に季仲も立上り、「御邊は今の合點か 岩淵とも云ひ合せ、忠盛、ナ、たゞ打殺した其跡で、戀を叶へて首尾よう」と、目と目で知らす横車、坂口までと時澄が、「追付け吉左右仕らん」「ヲ、サ待つぞ」と季仲は、都をさして別れ行く。跡を遙に打詠め、残り多けに立上る、母が手先もふるひ聲、「コリヤ平太郎なぜとめた。廻り逢うた夫の敵、いで追かけて」と行く先に、「マア／＼お待ち下され」と、止める腕をふり放し、有り合ふ杖を追取りのべ、背骨髑髏容赦なく、打ちするゝ息をつぎ、「ヤア爰な卑怯者、年來の親の敵、我と名乗つて顯はしたは、權現様の御手引、有りがたしと思はどな、母より先へ飛びかより、一かせなりとも討つべきに、まんそくな此母まで、氣違にしたは何の爲、ようのめ／＼と逝したなア。臆病者大腰ぬけ。憎や／＼腹立や」と、身をふるはして無念泣。平太郎も諸共に、むせぶ涙を押拭ひ、「段々の御腹立、御怒は御尤、あらぬ事を申上げ、おとどめ申した平太郎、いつ

かな憶れは致しませぬ。俱に天を戴かざる父の敵、夫どと名乗つた其時には、飛立つばかりの我が胸中。おめく此場をかへせしは、御覽のごとくアノ大勢、何程手しゆく働くとも、叶はぬ時は返り討。死する命は惜しからねど、某が相果てなば、申し、誰か残つて育みませう。とあつて討たねば父への不孝、二ツの道に迷ひしが、面體苗字知る上は、重て討つべき時節もと、寶の山へ入りながら、是非なく敵を助けしぞや。まだ其上に勿體ない、母人を狂氣にせし、御怒をしづめられ、平太郎が心の無念させつなさを、御推量下され」と、宥めつ詫びつ手を合せ、誤るも又涙なる。母も始終を聞くに付け、「尤なりさりながら、そなたに限りよもやよも、卑怯未練の心はない筈、老の一途に跡先なく、打擲したは母が誤り、倉忽で有つた。堪忍してたもこらへてたも、どこも痛みはせなんだか」「コハ冥加なき御仰、只今の御杖の跡、骸に痛みを覚えぬは、次第につもる御齡、御手の力もおのづから、お年の上の加減かと、思へば悲しうござります」「ヤアくくく、今打擲した其杖の、身にこたへぬが悲しいとや。親がひに無體の杖、世には我子を折檻し、異見の爲の打擲を、かへつて恨むる者も有る。母が力の弱りしを、惜み悲しむ孝行が、又と類もあるかいの。宿世いかなる境界で、貧苦をさする、かはいや」と、親子手に手を取りかはし、互に詫びつ詫びらるゝ、涙の雨は時ならぬ、時雨に袖やぬらすらん。か

かる歎を、立聞きし、お柳は心汲くむ端香はなが、茶碗もつ手もおもはゆく、しづく傍そばに立寄つて、
「ナウ申しお二人様ふたりさま、残らず様子は聞きました。扱あもくおいとしや。取分け旅はつらいもの
私が臥所ふしどは此庵このいはり、まばらには有りながら、暫くあれにてお休みあれ。獨住ひとりずみの事なれば、必遠慮きんりょは
御無用ぞ」と、奥底おくそこもなき響もてなしに、母は悦び、「是はマア様子を聞いたと有るからは、包隠つくみかくさう様も
なし。お詞にあまへまし、然らばお世話に」「ア、何のいな、一河がの流谷ながれの水、茶を入れかへて
馳走ちそうせん。サアくこちへ」と手を引いて、いたはり庵へ伴ひ行く。後をつくぐ平太郎、「テ
モ扱あも、行先ゆくさきに鬼はないとの世上よこしまの譬たとへ、かゝるけはしき山中にも、やさしき人もあれば有る。
まだ年若としわかな身を以て、何故ひかりずるの獨住ひとりずみ、ハテしをらしや」と獨言ひとりご、思ひつくまの鍋なべならで、茶杓ちやくの
えにし深緑ふかみどり、柳が本の肘枕いぢまくら、夢にうさをやはらしけり。春風に、糸よりかけて白露しらつゆの、玉にも
ぬける青柳の、二世の紐きつなにひかれくる、お柳は邊見廻あたして、おづく傍そばへ寄りながら、何とい
は洩もる露零つゆしろう。「申しく旅のお方、申しく」と音すれば、恟びつくりして起直り、「是はく御女中様、
母の介抱かいほうお世話の段々忝せうしし」「オ、笑止せうし、そりやマア何の事ぢやいな」「ア、いやく、きつとお
禮を申さにやならぬ。旅は道連みちづれ、世は情なさけと申せども、取分けあなたにはどうした御縁か廻り合
ひ、心までがゆりたやら、寐るともなしにつひとろく。無禮は御免」と手をつけば、お柳も

につと會釋あしやくして、「是はしたり、其様にお禮に及ぶ事かいな。母御様にもお勞つかれやら、今すや」とお願いはねが」「ハア扱は寐入られましたかな、嬉しやう忝かひい。是と申すも一樹じゆの蔭、何ぞの御縁でござりませう」「サイナ申し、其御縁に附きまして、問とひましたい事がござんする」「ハア、夫は何なんでか」「サア申し、外ほかの事でもござんせぬ。アノナお前様には、アノお内儀様がござんすかえ」「ハア是は改あらたまつたお尋でござります、が、お内儀様はまだ持ちませぬが、夫が何とぞ」「サアまだならば、持たしやんしたらよかるかと、いふ事でござんする」「さればう、今やなど持ちましては、たつた一人ひとりの母人ははびとへ、おのつと龜末そまつになる道理、不孝ふかうになれば」「イエうう、夫は悪い御合點、さつきお前がおつしやるには、若し返り討にあうたらば、お袋様を育はぐみ申す者がないと、おつしやつたではないかいな」「ハアいか様左様」「サア夫ぢやによつて女房にようばうを持ち、やとでも一人設ひきりけたら、其やと、お前様や、マア、アノナ、私が女房に成つたらば、夫こそほんにほんぐの母様と、俱ともに孝行盡つくさうもの。しんきな事や」と寄りそへば、「イヤもう先程さきほどよりの御深切ごしんせつ、見ず知らずの我々、お禮の申し様もござりませぬ」「アレまだいな、何とお聞きなされます、お前さへ御合點ごがてんなら、あなたは私が母様も同じ事、孝行が申したい」「サア夫は近比忝かひい。嬉しいは嬉しけれど、よもや今まで」「エ」「どこぞに可愛男かひいをこがある」「オ、わつけもない、男

もなけりや親もなし、兄弟もなし、何にもない「一本立」「テモ嘘ばかり。見れば見る程爪はづれの美しさ、尋常な事はいの。よう人が只おこぞ」「ホ、ホ、恥かしい事ばかり。山家生れのぶ骨な私、お前の様なよい殿御に、そうて見たいと思ふから、花の盛も目につかず、夜を數へ日を數へ」「サア夫でもつんとどうやら誠と思はれぬ」「アレまだ深いお疑、眞實誓文で、ほんに誠でござんする」「そんなら合うたり叶うたり、談合せうか」と手を取れば、「ア、嬉しや」と抱きしめて、わりなき中の妻結び、深きえにしの始なる。「あひに相生の松こそめでたかりけり」、壽祝ふ母の聲、銚子盃携へて、二人が中に押直り、「ヤレ、嬉しや、願ふ所の幸々。取りあへず祝儀の盃、嫁御さいて下され」と、母が手づから酌取つて、「めでたうござる」といふより外、三々くどき詞もなく、粹な老女の取結び、世界の母の手本なり。お柳は盃取納め、「此上ながらいつまでも、母様と存じます」「是はしたり、年寄つたわらはが身の上、面倒を頼みます」「イエエわたしが」「イヤわしが」と、中よき中の挨拶に、お柳も嬉しく、「イヤ申しおふたり共、どうぞいつまでも此所に」「テ、成程々々、母人の生國故、是まで常陸に住みけるが、様子有つて權現へ、年月歩を運ぶ我々、住所にとどまる間もなし」「サア夫なれば猶幸、三つのお山へ程近き、此邊を住家と遊ばせ。マア、旅路の御勞、何かの事は寐ながらも、庵の内でお咄し」

と、打連れてこそ入りにけれ。有漏うろうよりも、無漏むろうに入りぬる道なれば、是ぞ佛の御本なるらん。此御歌このみかの告つげにより、白川の法皇は、御病惱おんやみのいたはりとして、本宮の御社湯本みやしろゆもにとどまりおはせしが、賽かへりまうしの法施ほうせを捧さけ、祇園女御諸共きえんぎよに、還御くわんぎよは車の本もとまでと、山路の供奉ぐぶは備前守平の忠盛、賤しづが床几しやうぎを幸と、御腰みこしを暫しばしかけまくも、敬うやひ傳かしづ奉らる。法皇龍顔りやうがんうるはしく、「ヤヨ忠盛、朕ちんが重病ぢゆうびやうしつちよ悉除しつちよの爲、三十三度の祈願きぐわんを籠こめ、歩あゆみ運はこぶ驗しるしにや、惱なやも輕かろく覺さゆるは、偏ひとへに神の御利益おんりやく、悦やくばしや」と勅みことのり。女御も笑あはれ含ふくませ給ひ、「誠まことや妙たみなる三ツの山、始めて御供申せしが、聞ききしに増まさる靈地れいぢといひ、君の御惱おんやみもいつくより御怠おんおこたらせ給ふとは、殊更神の御守り、有りがたさよ」と宣のたまへば、忠盛はつと領りやうじやう 掌あゆし、「往昔平城天皇そのかみへいぜいてんわうを當山御幸みゆきの始とし、十三所順禮の始と申すは、花山院瀧はなやまのたきの流ながれの元にして、三ヶ年の其間そのあひだ、一千日の行おこなひより、修驗道しゆげんだうの始とす。其後九穴けつの蛇あはびの貝たき、瀧たきの本もとへ納をさめさせ、此度勅ちよくに隨したがひて、忠盛海士あまに申付け、瀧壺たきつばへ入れしかば、何様傘なにさまかさをひろけしごとく、れいぐと候へば、疑ふ所候はず。日本第一の名水 手の内に掬くすれば、長生ちやうせいを得るとかや。御惱おんやみも全快ぜんくわいたるべし」と、奏そうし申せば法皇も、歡感えいかん限りなき折から、吹きくる風の符こだまにつれ、えいぐ聲こゑ鯨波くじなみ、山谷樹木動搖さんくじくどうごうせり。コハ何事ぞと二方ふたかたも、驚おどろき給ふ御氣色おんけしき、忠盛騒さわがすつつ立ち上り、心を配くはる其所へ、謀叛むはん一味の和田四郎、ほくそ頭

巾に顔押包み、手の者引連れ追取巻き、「我々は深山に住み、順禮道者に合力受け、世を渡る山賊なり。路銀衣類を渡されよ。異議に及ばず此峠道、跡へも先へも通すまじ。何とく」と呼はつたり。忠盛ふつと吹出し、「事も愚や、白川の法皇遠御の道、備前守忠盛が御供なるぞ。普天の下に住みながら、御恩を知らぬ蠅蟲めら。三拜九拜かつつくばひ、道を開け」と大音聲。「イヤ法皇でも烏でも、翅をもいで追拂ひ、女御ばかりを奪ひ取れ」と、下知にむらがる溢者、一度に寄るを寄せ付けず、蹴倒しはり退け嘲笑ひ、「祇園女御を奪へとは、よつ程實の有る山賊めら。忠盛が供奉の帶劔、切味見せん」と抜きかざし、一ふり振れば三人五人、岩淵始め逸足出し、逃ぐるをやらじと追うて行く。後には二方いかゞぞと、叡慮を苦しめ給ふ所へ、取つて返す悪黨原、「ソレく女御を奪ひ取れ」と、既に危き後の庵、一腰ほつ込み平太郎、飛んで出でさままつかせと、弓手めでへ投げ退けく、「コレく母人女房ども、御二方の介抱を」と、詞の内より「いざく」と、母とお柳が御供し、忍ばせ申せば平太郎、心安しと抜き持ちて、支へる族を大袈裟小けさ、眞向堅割車切、残る奴原餘さじと、追かけ行くを、「ナウこれく、待つてく」と聲かけて、お柳は母を伴ひ出て、「上々様を預る上、お年寄られた母様に、過有つては不孝なり。跡は私が受取つた、内で申した所まで、早うく」と氣をせけば、「實もく、

母も大事の其上に」「サア申し、お二方にも氣づかひ有るな。かういふ中うちも危あやい。然らばそ
こまで立退たちかん」と、背指せさきし向けておいの身に、「孝行道はまつかうく。跡から早う」と云ひ捨
てて、谷道傳やみちひ急ぎ行く。韋駄ゐだ天走てんはしりに平忠盛、君はいかにといぶかる内、お柳が誘いざなふ法皇女御、
「コレく忠盛、是なる者が介抱故」と、仰もあへぬに、「申しく、土も草木も君が代に、住む
こそ深き御恩ごおんなれ。何のお禮をおつしやる間に、新宮の濱手には、舟の渡海ごかいも自由じゆうなり。一先
かしこへ御開おんひらき『實尤けい』と悦ぶ忠盛、「情の禮は追ての事。恐ながら」と負おひ奉り、女御の御手みでを
取りぐに、濱邊の方へと出で給ふ。又もや人音聞ゆれば、心に點うき吞込んで、見ゆる柳に手
をかけて、引けばしいわりしだれる枝、女力おんなぢからに押し撓たわめ、腰打ちかけてたばこ盆ぼん、きせるに憂
さははらし居る。うろく眼の手下まなこてしたども、「コリヤく女、法皇女御はどつちへ往た、早くぬか
せ」「サア其お方はいつの昔、あの坂口さかぐちをまつ下り、二里も三里もさつきの事。マアくちつ
と休やすまんせ、茶も沸わいて有りたばこも爰に」「ム、いか様、夫程に違ちがうては、天狗てんぐでもとどくま
い。ドリヤ一ぶく」と腰打ちかけ、てんでに煙草すつばく。時分じぶんもよしとこなたは氣轉きてん、「ド
レ茶を汲んで」と立つ拍子、ほんと刎はねたる柳の鞠まり、岩にぴつしやり打碎うちくだかれ、微塵みじんに成つて
死してけり。「扱あも氣味よし心地よし。よしく爰たちを立退いて、楊枝村やうじむらのよしみを便り、思ふ殿どの

御といつまでも、母御に孝行盡すもよし。折もよし有る夫婦が中、ふしぎに寄るも三熊野の、神の恵のえにしぞと、悦びいさみて、三重走り行く。爰も岸打つ浪の音、新宮の濱先に、つなぎ捨てたる渡海づくり、季仲が残したる、術と急ぐ武者所、驚六猿平引連れて、岩淵諸共かけ來り、「忠盛めが勇力に、此時澄が家來まで、イヤハヤ案に相違な不首尾。何分我は知らぬ分、味方顔して裏切せん。岩淵はいかにく」「サア某はあの森かけに身を隠し、法皇女御は足弱ども、此舟見付けて参るは治定、忠盛さへ討ち取れば、法皇は籠中の鳥、女御は安々都へ送り、黒帥殿の御簾中。ム、うまいく。此時澄はお公家様、汝も大名合點か」合點々々としめし合ひ、身を潜めてぞ待ちゐたる。斯とはいざや、しら波の、砂を踏み立て平忠盛、見ゆる汀の大船に、人音なければ幸と、君二方の御手を取り、とくくめさせ奉り、纜とかんとする所へ、待ちまうけたる惡黨原、それと聲かけ切り付くるを、ひらりとかはし楫追取り、はつしくとなぎ立つれば、爰の岩かけ森のかけ、我もくと顯れ出で、茅の穂先白浪の、切先立浪どうどう、途を失うて逃げ行くを、餘さじやらじと追つて行く。しすましたりと和田四郎、「サアサア此間がよい首尾ぞ」と、ひらりと飛んで乗り移れば、「コハ何者ぞ」と驚く玉體、手ごめにし、「驚六猿平合點か」「心得たり」と帆を引き上げ、櫓權取りのべさつさ聲、半段斗り押し出

す時しも、宙をかけつて平忠盛、「なむ三寶遅かりし。ヤア、天子に敵たふ人非人、其船戻せ」と呼はつたり。岩淵どつと打笑ひ、「陸でこそは負けてゐた、かうしたからは此方の物。アノ馬鹿つらを見よく」と、いふに忠盛身をあせり、行きつ戻りつ見付けるもやひ、纜しつかと手に搦巻き、天のあたへのもやひ綱、戻してくれんといひく聲。岩淵あせつて、「ソレ、ソレ、縄を切れよ」と下知すれども、刀は残らず打落され、さすが一本あら縄を、ほどかん折もあらしの潮、磯にはえいゝ引く力、戻すな行れよとゆふ浪の、とぢめん帆を巻き船を押して、「ゑいやんざ」火水に成つて押す力、引き戻さんず金剛力、ゆらりゆらくもみ合ひしは、小島の動くに異ならず。されども忠義の忠盛に、龍神部類の擁護にや、なんなく干潟に引き付けく、ひらりと飛び乗る勢ひに、恐れをなして和田四郎、ざんぶと飛込み水底くどり、行方知らず逸失せたり。這ひかどんだる二人の残黨、手玉に掴んで投込む所へ、おくればせなる武者所、拾ひ首の血刀さけていかめしく、「山賊に出合ひ切りちらし、漸只今參上」と、鼻も動かぬ廣言たらぐ。「チ、よい所へ武者所、君が御船の楯取して、長島まで守護せられよ。我は陸路に残黨原、取つて返さば防ぐ爲、濱邊傳ひに御供せん」と、指圖に是非も時澄が、時の用には楯取役、君も女御も安堵の思ひ。忠盛勇んで下知をなし、時刻移るとゆふ浪に、「チ、サ合點

ぢや、エイヤンザ。工面くめんが違ちがうて、エイヤツサ」ふせうぐに押すや此この艀ろづか柄がを取つて時の間に、早舟手舟に乗廻し、數千艘すうせんにて寄するとも、忠盛かくて有るからは、腕もさよ舟あま茶舟、軍船漁船押し切つて、破軍の劔先鋒先に、片端舟は一擱ひとつかみ、ころりくの丸太舟、てんたう天魔の障碍しょうがいもなく、公にすゝむる艀ふなとせほひ、敵は浪間にうつろ舟、守護する君が寶舟、千里一はね走舟、都の空へと還御くわんぎよある。

第二

時を得て、威勢ゐせい日に増す平家の館、備前守平忠盛、數度の武功の恩賞に、下し給はる閨の花、祇園女御と聞えしは、柳が枝に初櫻、梅の匂におひを含ませし、色香に勝りおとりなき、池殿御前と指向さしむけひ、乞目争ふ雙六の、左右に別れてお伽役、池殿方には進將監國貞、女御方にはお出入の、輕薄醫者の多熊法眼、勝負を二人が酒賭に、負方が呑む云合せ、おもひくの片最眞、いと媚めける遊びなり。「申しく池殿様、どうぞお勝ち遊ばせ。三度のお負でこの將監、續けさまに三盃、イヤもうどうもたまりませぬ。今度は極めてお前のお勝、法眼吞ますぞ覺悟召され。オ、さうぢやく、其石切つて、マアく六地をお塞ふさぎなされ」ア、これ將監助言ならぬ。した

が助言ぐらゐで女御様には勝てぬく。じたい忠盛様、簀の目よりは人目を忍び、年月戀に乞目の君様。ソレく今度は朱三が出ると、池殿様は又むしぢや。しゆ三くと呼び立つれば、女御は却つて池殿の、勝になれかし我乞目、打たじくと直なる、心に連れて簀の目の、しゆ三とすわれば女御方、法眼始めいさみ立ち、「サア又勝ちや將監殿、呑んだく」と盃を、突付けられて「池殿様、コリヤまあどうでござります。女御様は畢竟が勅、誂のお妾故、お客様同然、いかに亭主ぶりぢやとて、さうお負けなされては、此將監いきつきます」と、底意に針持つひいき口、「イヤコレ將監、其様に負腹たちやるな。亭主ぶりでも客ぶりでも、負けるが下手ぢや。併し女御様の勝ち續けで、此法眼酒がたらぬ、貴公は下手な池殿方で、酒が過ぎて面白かる。あやかり者め」と嘲れば、女御は氣の毒、池殿は女心の一筋に、傍の手前もはち紅葉、思はず顔の色目立ち、「ほんにく本意ない負け様。したが忠盛様の御祕藏の女御様、ひよつと自が勝つたなら、忠盛様が腹立てて、雙六ばかりか大事くの、人の花まで乞目のお上手、今からあなたの弟子に成り、此筒よりは忠盛様に、ふられぬ様にせうかいなう。將監、さうぢやないかいの」「左様ともく、じたい此雙六の簀は恐ろしい性根な物、唐土の玄宗の官女、虞子君楊貴妃と乞目争ひ、重三重四に朱をさいて、官職を給はる故、今の世までも重三重四といふ事を、朱

三朱四と呼びならはす。鑒の二つは月日を表し、人で申さば本妻お妾。ナア申し、お前様は御本妻、其本妻でも乞目ふりがナ、此白黒の石の數、夜も晝も筒を握り、五二五三に放さずば、本妻様はむしゝで、明目ばかりふつてがな。必油斷なされな」と、お偽ごかしに云ひ廻せば、法眼引取り、「コレサ國貞、法界悋氣おかれいゝ。戀に前後のわかちはない。殊に女御は法皇様から勅詔のお妾叶はぬゝ」と聞くより池殿せき立ち給ひ、「コレゝ法眼、自が女御様に叶はぬといふのかや。媚容はおとるとも、夫を大事大切に、思ふ心は負けはせぬ。勅詔沙汰はいやゝ」と、怒の詞に付け込む將監、「いか様法眼が勅詔呼はり、又しても氣にくはぬ」と、眞顔の論を聞く女御、「是はマアゝ將監の詞とも覺えぬ、何しに自其様な、さもししい心を持つものぞ。いつまでも池殿を、頼まねばならぬ此身の上、心にかけて給はるな」と、氣の毒顔の御氣色。「イヤいつまでも末長うとおつしやるが、池殿様の聞き所、此將監は吞込まぬ」「コレゝ何ほ貴殿が吞込まいでも、忠盛様がお吞込、ナアゝ申し女御様」と、多熊と將監相槌の、拍子揃へて焚付くれば、悋氣に追女氣の、穗に顯はるゝ盤の面、石も亂るゝばかりなり。間の襖を引き明けて、將監が嫁の若倉、しづゝ立出でしとやかに、「是はゝお二人様、おはしたなのお顔持、法眼殿も舅君にも有られもない、鴨川の水と鑒の目は、帝様さへお心にまかせぬとや

ら、勝負の知れぬが時の興お慰、夫を傍から何のかの、唐の倭の諺で、互にお氣の立つ様に、お伽ではなうて喧嘩の行司、少とお嗜み遊ばしませ」と、やり込められて顔と顔、まじめに成るぞ心地よき。「サアく申し女御様、奥の間へお越し遊ばせ、お二人置いたら又何か、池殿様にも俱々に、仕返しの勝負の雙六、所をかへて遊ばしませ。女御様からマアお出で」と、進め申せば立ち給ひ、「池殿様お先へ」と、姿繕ふ海棠の、花の袂を打覆ひ、娼引連れ若倉が、案内に付いて入り給ふ。跡を詠めて將監が、池殿の傍に寄り、「忠盛公とあの女御は、浮名の立つた深い中、法皇が吞込んで、勅詔のお妾、お前様は俗にいふ奥様の餅の形、日かけ者と同じ事、そこへ心の付かぬとは、身を知らぬと申すもの。かう申すもお馴染だけ、末の事まで思はれて、此將監さへくく思つてをります」と、實に見せたる空涙。聞くにましくる池殿の、胸の焔にそよぐ水、「悟氣がましい事いへば、あいそのつきる事もやと、包むに餘る物思ひ、若しも女御に自が見かへられたらどうせうぞ。恨めしや悲しや」と、身を震はしてかこち泣。二人は點きしすまし顔、膝と膝とをにじり寄り、「お道理く、ナウ御臺様、法眼が醫術で、あの女御を忠盛様に飽かする仕様、ナア申し、とつくりとお頼み有れ」と、吹込む毒氣を御臺は點き、「そんならどうぞ能い様に、法眼殿頼むぞや」「成程々々吞込んだ。仕様はかう」と傍に有り合

ふ料紙と硯、筆追取りてさら／＼と、書認めて差出すを、池殿御前手に取つて、「ヤア是は」「さう恠りなさるゝは、御得心でないさうな。忠盛様から大切に、お前ならでと思召し、行末長う添はるゝ様、かうするもお前のお爲。サア御得心でござるか」と、二人が工に云ひ廻され、「ハテ添ひたいが定ぢやもの、女御にあいそのつきる様、必々頼むぞ」と、仰をハット吞込む法眼、「ちつとも氣づかひ召さるゝな。首尾した上では、一廉の御褒美ちやが合點か」「チ、首尾さへ成れば望に任す」「イヤ夫さへ聞いたら實を入れて、お受合申します。必隱密々々」と、點き囁く折も折、勅使のお入と呼はるにぞ、二人は表へ、池殿は、「奥へお知らせ申さん」と、立ち別れてぞ入り給ふ。程なく沓音けだかくも、右大臣師實公、北面の武者所時澄を相隨へ、儲の褥につき給へば、館の主忠盛卿、進藏人諸共に、禮儀正しく平伏有る。右大臣殿正笏し、「いかに忠盛、貴邊の勳功勸賞には内の昇殿を赦され、其上女御を賜はる事、家の繁昌身の譽、有りがたくも思はれよ。今日の院宣餘の儀にあらず、法皇頭痛御惱煩によつて、熊野權現へ御立願有し所に、三夜に續くふしぎの靈夢、法皇の前生は蓮華王坊といふ修驗者、三山百度の歩の内、九十九度にて慢心發り、忽破旬の怒を受け、谷底へ投げ付けられ、支體は微塵に碎くといへども、頭は柳の梢に止り、夫より星霜遙に移り、谷の柳は六十餘丈に生ひ茂り、梢に残る前生の

髑髏、風の吹く度々に、動くに連れて頭痛の惱、是を平癒あらんには、彼の柳を切り取り、王城に於いて三十三間の御堂建立あらんと結構。則ち忠盛へ任すべしとの院宣なり」と述べ給ふ。忠盛すさつて頭をさけ、「物數ならぬ某、かよる宣旨を蒙る事、武士の大慶是に過ぎず、畏り奉る。ヤア、蔵人、大切なる君命、熊野山へ立越え、柳の在所を尋ね求むる其使、其旨心得たるか」「ハ、はつ」とばかりに蔵人が、お受申せば、「ヤア其役目は此時澄、假初ながら天子の御用、陪臣づれは遣られぬ」と、支ゆれば師實公、「僿忽なり時澄、此度の造營は、忠盛萬事承はれば、私には計らひがたし。武者所の役柄は、大内の非常を正し、警固の外は、さして諸用に構はれそ」と、仰せに時澄、「サア夫は夫で濟み申すが、濟まぬは謀反に合體した源義親、太宰帥が在家の詮議、爲義が預つても、サアいまだ有無の沙汰もなし。ナウ蔵人、源氏の勇氣に氣を呑まれ、臆病風での延引か」と、儕が一味の空とほけ、云ひほぐすれば師實公、「扱々いらざる作配立、平家の事は源氏が正し、源氏の悪事は平家より、源平兩家相互、君を補佐する武將の役。さりながら、義親が問狀今日中、忠盛きつと沙汰せられよ。まづ法皇へ領掌の旨奏聞せん。早退出」と立ち給へば、忠盛主従式禮に、見送る先へ武者所、肩肱はつて立歸る。引違へて出る奏者、「陸奥の冠者爲義、大宅四郎惟弘、召によつて參上」と、披露につれて入り來

る。智仁勇を備へたる、其源の爲義とて、十八歳の角額、長上下を爽に、追武將の其骨柄、付添ふ武士は大宅四郎太夫惟弘、六十に餘る腰刀、進藏人家貞が、舅の禮儀内證口、威儀を正して座に直る。爲義忠盛に打向ひ、「今日の御召、御用いかど」と有りければ、「チ、早速の御來駕祝着々々。先達て館へ預けし義親の儀、改め申すに及ばねども、五年以前、法皇熊野へ御幸の折から、岩淵和田四郎といふ者、鳳輦に向ひ狼藉せしは、季仲が所爲なる由。彼の和田四郎は、義親の郎等鹿島三郎と聞き及ぶ。此程都に徘徊し、民間に亂れ入る事日夜の注進。是によつて黨類を搦捕り拷問にかけし所、太宰黒帥又源義親叛逆に紛れなき條再三の白狀。さるによつて義親を召捕り貴殿に預け、逐電せし季仲が在家、白狀させられよと申渡し置きたるは、親子一所でないといふ爲義の面晴。先刻禁庭より師實公別勅の趣、今日中沙汰致すべき勅詔なり」と有りければ、爲義謹んで畏り、「大切なる詮議の役、殊更父子の間と申し、旁以てゆるかせならず、百度千度責具を以て拷問に及び候へども、いまだ白狀仕らず、是なる惟弘が計らひにて、晝夜寐さよぬ現實、十日餘りに及ぶ所、更に色目も見えざれば、此上は勅詔に任すべき外候はず」と、言上有れば惟弘も手をつかへ、「爲義の詞のごとく、様々におどしつすかし責めとへども、白狀致さぬしぶとき魂。某とても存じの通り、義親を守り育てたる由縁によつて、何

とぞ善心に翻へさせ、源家の汚名をすゝがんと、心を盡すかひもなく、愚老を始め爲義が胸中、御賢察下さるべし」と、詞も半涙ぐむ、心を察する忠盛主従、俱に心をいためしが、「ナウ爲義、今日改めての勅諭有り、季仲が城郭明白に相知れなば、討手には爲義たるべし。又義親が白狀なきにおいては、爲義が手に斷罪せしむる條院の勅命。急ぎ歸つて今一應問狀にかけられよ。扱々方々の胸中察し入る。幸薄酒到來せり、酒は愁を拂ふといへば、心ばかりの我變應。藏人早く」と仰の内、急いで用意や有りつらん、長柄盃臺肴、お傍小姓が汲む酌に、忠盛受けてすつと乾し、「爲義一つ」とさし給へば、「コハ御懇志の御盃、頂戴申す」と取り上げて、てうど受けたる盃に、「肴を勸めん、それく」と詞の下、藏人立つて一間より、袋に入れたる太刀一振、忠盛に傳ふれば、取直し押戴き、「抑此太刀は、上平太貞盛將門を退治の時、朱雀帝より給はりし小烏丸の名劔、家に傳はる重寶なれども、義親白狀なきにおいては、是を以て刑罰せられよ爲義」と、紐を結んで祕封を付け、膝元に直さるれば、爲義心に急いたる面色、「ハツ義親が刑罰、志の賜、祝着には存すれども、平家の家に小烏有れば、某が家にも鬼切と申す名劔、前九年後三年、數度の軍に勝利を得し源氏の重寶、何ぞや平氏の劔、源家に用ゐる謂なし。若輩者と思召しての御賜、申受けたる同前」と、押戻したる爲義の、心をはかつて惟弘は、

只默然と詞なし。忠盛大きに打笑ひ、「爲義には若輩故、危急とばし思はれん。叛逆一味の義親は、爲義、貴殿の父ならずや。源家の重寶鬼切丸の劔を以て、現在父を斷罪せられれば、御身は忽不孝の名を世上に觸れ、鬼切の名劔にて、同じ源氏を切りたりと、劔も徳を失ふ道理。そこを察して此小烏、爲義の手を借つて、忠盛が討つも同然。さすれば不孝の科もなく、勅諭も立所に、拔群の忠節。惟弘いかに」と忠盛の、仁義を兼ねたる引出物、ハツと感するばかりなり。「ハア適名將聰明睿智。源平兩家と別るれども、直なる掟の忠盛公、志の御賜、頂戴有れ」と惟弘が、取つて渡せば爲義も、すさつて三拜押戴き、「忠義の道には父子兄弟、戦ひ挑むも武士のならひ、彌白狀なき時は、只一討」と跡云ひさし、恩愛親子のうき思ひ、さし俯いておはします、胸の思ひを汲み取る惟弘、「若しもや白狀召されなば」「チ、サク其時は、忠盛が身にかへて義親の命乞、禁庭宜しく奏聞せん」「ア、有りがたし」と悦ぶにぞ、爲義は封印の、袋をつくづく見るからに、此小烏も音を出さば、父かはいとや叫ぶらん。思へば武士の身の上程。「忠盛公おさらば」と、涙隠して立ち上る。陸奥の冠者が元服して、六條判官爲義とて、保元以後の戦ひに、子の義朝にあへなくも、討たると謂を今爰に、思ひやられて哀なり。惟弘も打しをれ、「イザお暇」と立ち上るを、忠盛「暫し」と止め給ひ、「酒はつれば何とやら、藏人一獻すよ

めよ」と、仰にハツと惟弘が、戴く盃つぐは掣、肴は忠盛臺引き寄せ、手づから給はる有りがたさ。「兩人さらば」と忠盛公、「藏人來れ」と打連れて、帳臺深く入り給ふ。跡に惟弘手に受けし、肴を詠めてハアはつと、心に點き立上り、「若殿ござれ」「供せい」と、持つて立ちたる太刀袋、情もこもる口ごもる、肴を包むかみならで、心の底をほり川の、館をさして 三重「サアサア申し義親様、白狀をなされませ。敵の在家さへおつしやれば、存分に寐させます。アレまだいの。此様な鳥の羽でこそぐつてはお目が覺めぬ、責道具のどら太鼓、耳のはたで打たうちやないか、まきの殿」「ヲ、夫がよかろ」と立騒ぎ、晝夜をわかね現責、詮議の底をほり川の、六條通りに一構、陸奥冠者爲義の館には、内匠頭義親を預りて、太宰帥季仲がたて籠る、在家を尋ぬる問狀の、役目もつゞき、姦ども、時かはりとは知られたり。「ヤイめろさいども、是程目を明いてゐるに、又しても耳の端でやかましい、置きあがれ」と、睨む目玉もとろく目元。「サアお目明てござるなら、所を早う御意なされ」「知らぬはい。同じ事を毎日々々、どの様に責めたとて、知らぬ事はいつまでも、知らぬぞく」「サア知らぬくとおつしやつても、お前より外知つた者がない故に、コレ申しく」「サア聞いてゐるはいやい」「サア聞いてござるなら早うおつしやれ」「ソリヤ何を」「何であらうと敵の在家を」「おりや知らぬ。何にも知らぬ。知らぬ

知らぬ」も白川夜舟、楫取り兼ねる風情なり。源家の大老大宅四郎太夫惟弘が女房、夫の留主と氣を付けて、奥の襖をあけほのが、腰に梓の、弓取の、行儀は常の座敷に立出で、「是は扱養君、まだ白狀は召されぬの。其様にうつらく、いつ事が干まするぞ。お前の心が心なら、八幡太郎義家公の御惣領、家督をも繼がしやる筈。爲義様はこなたのお子、まだ年はいかねども、武勇といひ、忠孝の道を守り、八幡殿によう似た大將。お前はマア誰に似て、其様な惡者にならしやつた。季仲が謀叛に一味して、天下を騒がす無道人。養ひ育てた我々、御先祖へ恥しい。アレ／＼人にばかり物いはせ、うつらくと夢現。ソレ女ども起せやい」「アイ／＼。いやもうどの様に致しても、お目の覺める事ぢやござりませぬ」「サア夫でも言はせねば埒が明かぬ。ドレ／＼ちつと手がはりして、白狀ささう」と立ちかゝる折も折、「進藏人様御出なり」と、書院に小姓が取次ぐ聲、「ヤア／＼、鞆藏人が見えたとは、ハテ心得ぬ。夫惟弘殿、爲義様のお供して、鞆の主人忠盛様へいかしやつたに、歸りの遅いを案じる中、鞆が見えるもいぶかし」と、出向ふ一間へ入り来るは、藏人ならで若倉が、襦袢姿のしとやかさ。「是は／＼、鞆殿かと思ひの外娘の若倉。シテ藏人は見えなんだか」「アイ、夫藏人は御用しゆく、名代に參る様にと申されました」「夫は大儀や、ようこそ」と、親子は膝を押しならべ、「今日は爲義様と様諸共、いま

だ忠盛様と御内談の其間、藏人が申付け、内意に参りし其譯は、舅惟弘殿には、養君義親様を預り、敵の在家を御詮議有れども、今に白狀ないとの事、そちも義親殿とは乳兄弟の事なれば、俱々に詮議して、お年寄の親々へ、心づかひを休むる様にと夫の内證。夫故に参りましてござんす」と、聞いて點き、「サレバイノ、丁度けふで十日餘りの現責、今も今傍へいて、意見をして夢中に成つてゐるやつしやる。ソレ又俯いてぢや、起せ」と急付かれて、又打ち立てる太鼓の音、「エ、鈍なめろさいども。目を明いてゐるもの、眼玉にはかゝらぬか」と、呵る詞も現やたわい。「サア、早う白狀」と、口々傍からせがめども、ふらりくは糠に釘、こたへは躰ばかりなり。「あれを見や若倉、毎日毎夜あの通り。幸ひおぢやつたそなたと二人、責めて見よう」と立寄つて、「コレ、爲義様や、夫の歸りも追付でござるぞや、今の内に言はしやれ」と、背中を突けば目をほつちり。若倉も躰寄り、「アノ申し母様、もう御詮議には及びませぬ。何ほお隠しなされても、天命といふもので、連判狀の在所、季仲が隠家も知れました」と、聞くより義親立上り、「ヤア、季仲が有家、近江に居る事知れたるな」「アイ其通りでござります。其近江路を聞かうばかり、夫程知つてござるもの、なぜにとうからおつしやらぬ。とてもものに方角も所の名も、有りやうに言はしやんせ。彌、お隠し召さるれば、今日中にお命がないとの

事、夫を知らせに來た私、根が乳兄弟の好だけ、サア／＼次手に白狀」と、詰めかけられて空とほけ、「ア、寐ぶたい／＼。近江蕪の風呂吹はどうぢややい。近江は蕪の名物、あんな蕪を矢に矧いで、神通の蕪矢を射たらよかるといふ事ぢや。ア、ねぶたや」と伸欠、「是から奥でぐつたりと、ねさしてくれ」とふり切つて、羽がいじめなる繩取り／＼、娼どもが「ならぬ／＼、ねさはせぬ」とどら太鼓、打ち立て／＼追うて行く。跡を詠めて母娘、惘れる中に曙が、「ナウ若倉、誠に在家が知れたかや」「ア、母様の何のいな、今の様に申したは夫が智略。どうしてなりとかゝ様やとゝ様のお心を休める様、義親様には取分けて、白狀ないに極れば、彌敵へ一味の印、首討つて出せと有る大内の御評定。藏人殿も笑止がり、舅殿の養君、けふの日中が生死のさかひ、さつぱりと白狀させ、命助ける計略には、所も近江と聞いたれば、かう／＼せいと夫の指圖。今の様に申しても、中々氣強い義親様。母様仕様はない事か」と、いへば點く涙聲、「そんなら白狀ない時は、けふ限に首討てとや。ハア夫はひよんな御評定。さりながら、どうぞ助ける仕様には、随分いはせて見る思案。そなたも奥へ」と勸むる所へ、「ヤア／＼兩人暫く待て」と聲をかけ、西八條より立歸る陸奥冠者爲義は、手に持つ太刀の袋さへ、しんくの紐の解けやらぬ、胸の思ひを押包み、しづ／＼と座に直り、「ヤア曙、同道せし惟弘は、宿願の旨有りとて、六

角堂へ參詣し、跡よりも歸るべし。今日忠盛へ招かれたる仔細外でもなし、義親彌白狀せずんば、コレ此太刀を以て首討つて見せよと有つて、平家の重寶小鳥といふ名劍、コレ此如く封を付け、忠盛手づから下されたり。つくづく心を察するに、義親は現在の父、我は又子の身として、親を討つは不義不孝、討たねば違勅の科通れず、忠盛もそこを察し、いはぬ心は此袋、口を緘ぢたる封印、拔さしならぬは院の勅命。ナア曙若倉、われ達もつながる縁、ほどけ兼ねたる爲義が胸中、親を討つて忠義になるか、不孝になるや、是を以て思案をせよ」と、刀かけに直し置き、しをくとして爲義は、帳臺深く入り給ふ。跡には親子顔見合せ、ハテどうがなと取つおいつ、詠める刀詮方も、「女の智慧に是がマア」「母様さうでござんする、何分にとゞ様が、お歸りあらば俱々に」「ヲ、夫もさうなれど、思案をせいと言はしやつたが、どうがよかろ」と手を組んで、額によせる皺の上、又もや皺を寄せにけり。若倉も諸共に、打傾いて居たりしが、「申し母様、とかくは無い、奥へいて、義親様を責めまして、白狀さへなさるれば、一味でない申譯、立ちさうに存じます」「ヲ、それく、夫がよかろ。其通りを爲義様へ申すが、則思案の返事。サアくおぢや」と打連れて、帳臺さして行く跡は、人のとだえを眞黒出立、かたへの井戸から忍びの頭巾、邊を見廻し相圖の笛、呼子のしらせも折義親、差足拔足、竊が耳に呬合

ひ、一卷取出し手に渡し、「夫こそ鹿島三郎より受取つた、諸國の廻文連判狀、甲賀山の陣所の案内も内に有り、季仲へ届けてくれ。コリヤ將監、汝が忤藏人を味方に付ける手筈は追つて、萬事首尾よく仕果せなば、國大名に取立てるぞ、悦べく」
 「コハ有りがたい御仰、甲賀山へ出立も今宵が内、萬事しめし合さん爲、とくより忍んで最前から、様子は委しく。あの太刀掛にかけたる太刀、忠盛から爲義へ、お前を殺せといふ事迄、コレかうく」と呟けば、恟りしながら立寄つて、袋を取上げ打點き、「中には彌小鳥丸、勅諭と有るからは、何でも大事の預り物、是も次手に持つていけ。紛失の咎にして、爲義めに詰腹切らすはよい氣味く。我も跡より忍び出で、何事も重ねてく」「けに尤」と太刀受取り、「然らば隨分首尾よう」と、しめし合する非道の庭、心おくには聲々に、「義親様はいづくにぞ」と、尋ねる聲に驚く二人、太刀を大事と縁の下、忍ぶ將監、義親は、狸寐入の空舁。「コレく爰に」と姉ども、追々に走り出で、「ナウ藤枝殿、人をねさせぬ報いやら、こちらに滅多に眠たうて、居眠つてゐた内に、よう抜けてお出でたなう。サアくお目をお覺し」と、どちらも太鼓も打交に、鳴せば耳に兩手を當て、「ヤレかしましやく、こりやく赦せ」と逃げ出せば、「又もや奥で寐ようでな」何國までもとどら太鼓、かやせくと晝狐、「だまされさんすな横野殿」花されたとは白書院、襖の内へと追うて行く。

庭には將監すまし顔、太刀を提ひつきけ一卷くわんを、大事と見やる石垣の、水ぬき門もんの穴あなかしこ、人はしら洲すに身拵みしらへ。夫と見付ける若倉が、ひらりと飛びおり聲をかけ、「太刀を奪うばふは何者ぞ。やらぬく」とむしやぶり付く。物をも言はず振りほどき、行かんとするを待てくと、留めるをかはし當身あてみを入れ、ばつたり轉ころぶを見向みむかせせず、うましくと四つ這はひに、はふくくどる土龍どろ、體からだはふとく出兼でかぬる間に、むつくと起き立ち若倉が、長押ながしの手鑑てやりあづき追取りのべ、「曲者くせもの待て」と突き留めたり。ウンと叫ぶは塀へいの外、戻りかよつて大宅おほやの惟弘、目覺めおぼえつよき太刀袋、一卷口くわんに蠢うごつく竊しのび。内には仕留むる聲高々、「小烏の御太刀を、奪取うばひつたる盜賊たうぞくを、若倉が突留つきどめたり。出合いあひ給へ」と呼よはる隙ひま、外には首をかき落し、袋も一つに引ひかよへ、裏門口へと走り行く。何事かはと冠者爲義、曙諸共義親も、緣先えんさきに踊り出で、「盜賊はいづくにをる。太刀を奪うばうたは何者ぞ」と、仰ぎやうてんがほ天顔に驚けば、「則ち爰に」と引入るゝ、竊しのびが死骸しがいは、「コリヤどうして、太刀も首も」と驚く若倉、爲義は諸手を組み、ぐつともいはぬ心の工夫くふう。曙親子は顔と顔、惘あはれ果てたる其中に、義親一人が打點うちうちき、「盜賊は突留めしが、奪うばはれた太刀、ドレどこに、小烏は忠盛が重寶ちゆうほう、其太刀が無いからは、預あづかつて來た爲義、言譯いひわけには痛い腹、切らねばなるまい。笑止せうしや」と、何なにがなぬする口車くちぐるま、横に押すとは見て取る老女、「コレ義親殿、小

烏にもせよ其太刀を、爲義殿が預つてござつたを、いつ此方こなたは見やしやつたぞ。サア何を證據しやうこに痛い腹とは、よう言はしやつたなう。こなたはく。コレ、大惡人のこなたの首討てと有る勅諭、討たねば勅諭に背くそむといひ、討つて渡せば不義不孝。親のこなたを討ち兼ねて、此ばばや娘に太刀を預け、よい思案してくれと、頼んでござつたはいなう。まだ年がいかいでも、親子の道を辨わへて、切り兼ねでござる爲義様。夫に何ぢや腹切れとは、胴欲どうよくな、よいいはれた事。其五音いんで盜人ぬすめも、大方に知れて有るはいの」「ムン盜人ぬすめが知れたとは、扱はは若倉わかくらわれぢやよな」「エ、イ、此若倉が盜んだとは」「ハテ盜人たけくしい。太刀を奪たうひし盜賊たうぞくを突留たづめた若倉、なぜ太刀は取返さぬ。サア其太刀、ドレ見よう。ハ、ハ、其死骸はわが舅しやく將監國貞。嫁のわれと點うなづき合ひ、盜んだに極きはつた」「エ、イ、そんなら此死骸は、舅御將監様でござんすか」と、又恠びつくりの若倉が、軀みくらに立寄り見廻せども、「見知つたお首が無いからは」と、騒さわぐ娘に驚く母、義親が獨笑ひとりゑ、「コリヤどこへとばしりがかゝらうも知れぬく。若倉何と云譯有るか」「サア夫は」「サア何と」「すりやどうでも此死骸は」「ヲ、將監に極つた。云譯立たぬと容赦ようしやはない。われから先さきへ」と立上る。「ヤア義親殿まづ待たれよ。盜賊爰ひなに」と一間より、歩み出づるは大宅四郎惟弘、小脇こわきに抱かかへし挾箱はさみばこ、眞中まんなかにどつかとおろし、「娘若倉に詮議はない。曙ひかも控へて居

やれ」と押直り、「ナニなう爲義公、今日と申し胸中嘸ぞと察し申した。追つて御安堵させ申さん」と、挨拶のべて惟弘は、義親に打向ひ、「イヤハヤ盗人たけぐしいと、出はうだいに云ひさがし、身の科を人にぬる盗賊の正體、お目にかけう」と蓋押開き、上に竝べる太刀袋、一卷を咄へたる甲頭巾の首諸共、見るよりぎつくり義親が、胸に覺えもさあらぬ顔。惟弘騒がず、「ヤイ娘、此首の實檢で、盜賊でない明を立てよ」と詞の下、頭巾を取つて見る顔は、「ホンニこりや將監様ぢや」「ドレ誠に將監殿。どうしてこなたの手に入りし」と、惘れる曙若倉が、「將監様と知らなんだは、忍び姿の黒裝束、お首はと様お前の手に」「チ、サク。西八條より歸る道、爲義公に引別れ、六角堂へ參詣し、裏門通りを歸る時、水門を出る其將監。スハ曲者ぞと見る内に、見しり有る太刀袋、一卷を口に咄へ、逃げ出づる時も時、内の騒動そちが聲、何の苦もなく首かき切り、立歸つて能く見れば、姫の將監國貞。なむ三寶、日頃の積惡、斯く有らんは合點ながら、若しも此太刀餘人の手に渡りなば、ノウ爲義公」「けにもく、此爲義が難儀の難儀重なるべきに、能き折に歸り合ひ、再び手に入る嬉しさ」と、父義親を尻目にかけてのたまへば、善惡正しき惟弘が、「ヤコレ義親殿、こなたはモウ目が覺めましたか、眠たうはござらぬか。大きな目玉をぎろつかし、一はな立つてさよいこさい、盜賊の手引したは、彌こなたに極つた」

「ム、何と、此義親が手引とは」「イヤあらがふまい。證據しやうこといふは其死骸しがい、將監とは又何を印しるしに
 おいやつた」「サア夫は」「夫はとは。ハ、ハ、ハ、ハ。あのごとく眞黒出立、現在の嫁よめでさへ見違へ
 た將監、首もなく印しるしもないあの骸からだ、將監ぢやと見知つた此方こなた、手引といふに相違さうみは有るまい。サ
 ア、何と」と、一句の理詰りづめにさしもの義親、コリヤたまらぬと逆け行く首筋引戻し、老の手先
 も忠義に強き、用意の早繩はやなはぐうぐうと、しめ上げぐどつかと引するゑ、「人に惡事をぬすり付け、
 身を遁れんとは卑怯者ひけふもの、科極さかつた大罪人だざいにん。刑罰けいはつは爲義公、もはや猶豫いうよに及ばず」と、太刀の袋
 を指出さしだせば、爲義取つて封引き切り、鯉口こひぐち抜きかけとつくと見、「いかに惟弘、季仲が在家ありかの白
 狀、問落こひぐちせしか何とく」「さん候さうらふ、斯くまで仕込んだ極惡人ごくあくにん、問狀までも候はず。此一巻を御
 覽有れ」と、刀の筭かうがい拔持つて、口をこち明けこち放し、「連判狀に候」と、渡せば義親、「ヤア夫
 を」と、立寄る繩付惟弘が、「どつこい、どつこい」と引居ひきすゆる。其間そのまに爲義押開き、一々とつくと
 讀よみ下す廻文狀くわいもんじやう、「何々、叛逆ほんぎやくの張本ちやうぼん、太宰帥だざいのそつ、季仲が在城甲賀山ざいじやうかみがやまと讀終り打點うちちゆうなづき、「ホ、出
 かしたく。此廻文手に入るこそ、武運ぶうんを開く瑞相ずゐさうぞ」と、卷納め懷中くわうちゆうし、「ヤア、惟弘、勅諭ちよくてんの
 上預る小鳥、義親の刑伐けいはつは其方に任すぞ」と、太刀を投遣りつゝ立上り、勇み進んで入り給ふ。
 「コレ、く申し」と惟弘が、續つづいて入らんも仔細は知らず、親子三人顔見合せ、とかう思案に落

ちざりしが、心をしづめ、「ナウ曙、爲義公へ渡せしは、謀叛徒黨の連叛狀、敵のありかも明白に
現はして有る上は、白狀も同じ廻文。義親白狀有る時は、斷罪にも及ばぬ筈。夫に今此太刀を
渡し、惟弘に任すとは、ハテ心得ず」と眉に皺、じろりとしたる義親の、顔をつくく曙が、「コ
レこなたに一味の將監國貞、惡の報いは目の前に、娘や夫が手にかけたも、天道様が手引して、
御成敗も同じ事。鞆藏人も内證から、どうぞこなたを助けうと、若倉をおこされた志。ナウ
娘」アイ、成程さうでござんする。どうしてなりとお命が助けたさ、心を碎く我々より、と様も
かゝ様も、是程にまでとやかくと、心盡は何故ぞ。ちつとは心を改めて、善心に成つて下さり
ませ。申しく」と取りすがり、鬼に教化をするごとく、恨みつ泣いつ親と子が、涙に誠を顯
はせり。惟弘睨を數たとき、「曙、娘、何にもいふな、悔むなく、此上ながらへ置くならば、ま
だどの様な不覺を取り、家の滅亡計りがたし。爲義公の仰に任せ、斷罪は只今ぞ」と、太刀取直
し拔放せば、眞劍ならぬ木刀なり。是はくと惟弘が、暫し詞もなかりしが、やゝ有つて打點
き「ハツア誠や忠盛公、心を籠めし此小烏、義親白狀召されなば、助けよとの志忝し」と押
戴き、押直つて袂より、包みし物を取り出し、「女房、娘、此内をよくく見よ」と指寄すれば、
あいと取上げあけほのが、つくくみつの引肴、是はあられもアラふしぎと、娘も俱にいぶか

る内、諸肌もろはだひん脱ぬぎ我われと我われが、指添腹さしそへに突つ込んだり。是こゝはと妻つま子が右左みぎひだり「情なさけなや」何故なんぢに」と、
 すがり嘆なげくを押退おしのけ突退つきのけ、一息いほつとつきあへず、「ソレ其肴さかなは鶴つるの庖丁はうちやう、まつかくせよと忠
 盛公もりこうの判じ物。けふ八條の館やかたに招まねかれ酒宴しゆゑんの上、爲義公ゐぎこうへ其小鳥そのこどり、眞劍しんけんの身みを指さしかへて、身
 變はりといふ木太刀きただちの謎なぞ、某なれへは其肴さかな、三切みきれは則身すなはちみを切きれと有ある御賜おんたまの、戴をかいて歸かへる道みち、日比信ひびのぶず
 る救世菩薩くせぼさつ、六角堂りっかくどうへ暇いそを申し、死しぬる覺悟かくごの月つきも日も、けふを其途そのみちの門出かどでぞや。ナウ義親公ぎしんこう、
 若倉わかくらもまだ未生みしやう以前の事いぜんなれば、是こゝまでいはぬ物語ものがたり、爲義公ゐぎこうにも帳臺ちやうだいにて、此身このみの懺悔ざんげを聞きい
 てたべ。某武士なれの家に生なれながら、若年じやくねんの比ひはたど、劔つるぎを見る事ことかへふつ叶かなはず、其比度たひど々の
 軍中ぐんちゆうに、閑いさぎよを聞きく時は、忽たちまち正氣しやうきを取失うふ大臆病たいおくびやう。時ときしも後三年ごさんねんの戦たたかひは、武衛家衛兄弟たけゑけいへいけいが
 叛逆はんぎやくを鎮しづめん爲ため、八幡太郎義家公やちなんたうぎけこう、鎮守府ちんしゆうの節刀せつたうを給たまはり、奥州あうしゆうに向むかはせ給たまふ。親光任おやみつたが願ねがひ
 により、我われも御供おんご申まうせしが、何なにをいうても臆病おくびやう故ゆゑ、手柄てがらは扱あ置き、何なんとぞして古郷こきやうへ歸かへらん我われが
 そぶり。義家公御覽ぎけこうごらんじ給たまひ、「軍令ぐんれいに背そむく卑怯者ひけもの、一矢ひとやを古郷こきやうの土産みやげにせよ」と、切きつて放はなさせ給たまふ
 符箓ふがふ、命いのちからぐ持もつて歸かへりし恥はしき」「ヲ、それく、思おもひ出いだせば早昔つばる、壺井つぼいの御所ごしよには剛臆がうおく
 の座ざを定められ、景政かひまさの高名かうみやう、兼杖けんぢやう介兼秩父けいかねちちふの妻女さいぢやう、剛かうの座ざ竝ならびの羨うらやましく、來くる日もく、此曙このあけぼの
 は、臆病おくびやうの座ざに付ついて、袂たもとで顔かほを押包おさみ、父平太夫國妙殿ふへいたふくみくみよどのと、泣なかぬ日ひとてはなかつたはいな

う」「其時給はる烏羽からすはの、ヲ、夫よ、氷こほりといふ字の謎なぞも解とけ、鬼切丸の御太刀おんたちを、持參せよとの御内通ないつう、我が臆病おそもの其元は、母人の御不便餘ごふびんあまり、鷹の肝くじかきもの祕符ひふの業わざ。其云譯に母人は、其座で自害じがいのいたはしさ。夫より心も剛と成り、鬼切丸を携たづさへて、又奥筋に馳向はせむかひ、君の不例ふれいも忽に、安々敵を討ち隨へ、めでたく凱陣がいじんましませし」と、語るも聞くもめざましよ。「ナウ義親殿、其時の勳功こうに、藁わらの上から預りし此惟弘、麒麟きりんも老いの手業にて、引かれぬ弓を腰に張り、矢よりも早く立つ月日、いつの間に其様な惡人に育てたと、思へば此身の科さかぞかし。我が臆病の其昔、今切る様に其時に、腹切つて死んだらば、こなたの様な胸欲むすよくな顔も見まい。さりながら、臣下は主を諫めて死す、御先祖ごせんそへ申譯の此生害このしやうがい、又一つには忠盛の、三切の謎なぞをといたりと、こなたを助くる此身がはり。娘よ必ず藏人へ、此由とくと云ひ傳へ、見捨てられぬ様にせい。心にかよるはそちが身と、義親殿の成行なりゆきが、迷ひに成るは」とどうと伏し、痛手の齧喰はぐさくひしぼる、血汐の涙ぞやるせなき。夫の歎なげきに曙は、「自みづからとても此上に、ながらへて何とせう、俱ともに冥土の供せん」と、刀取る手を若倉が、「ナウコレ夫それは」とすがり付き、なだめるも又涙なる。「ヤア、聊爾れうじめさるな」と、進藏人かけ入つて、漸やうく刀もぎ放し、「コハ舅殿しゅうどの、早生害召されしな。主君忠盛には、法皇頭痛ほうづうつうの御惱ごなうによつて只今院參。申付けたる其趣おもひ、忠節あつき惟弘、忠盛が胸中きょうちゆうは能く察すべし、

叛逆に一味の義親、白狀に及び及ばずとも、惟弘忠死を遂ぐる上は、義親の罪一等を宥め、出雲國へ流罪との院宣なり」と、高らかに呼はる内、早昇き入るゝあやしの張興縁先に扣ゆれば、惟弘は只嬉しげに、「死ぬる今は際までも、心にかゝるは義親の、行方いかにと案ぜしに、よくも計らひ給はるものかな。それく早く用意を」と、いふに義親轉倒敗亡目を覺し、「何々、此義親を流罪とは、ハアしたりく」と身を悔み、「何事も叶はぬよな。ハア、さうぢやく。惟弘が腹切つたは、おれを助けう爲で有つたか。コリヤ今まで世話に成つた上、命を捨てて夫程に、思つてたもる夫婦の衆、嘸や腹が立つたで有らう、堪忍してたもこらへてたも。モウ流されて行くからは、又對面は未來で逢はう。さらばく」としをるれば、「ナウ和子、こなたは心が直つたか、善心にならしやつたか。嬉しやく。ナウく曙聞きやつたか」「アイ聞きましたく」「其善心を今一時、早う直して下さつたら、ナウ娘」「アイ、とよ様の切腹も、どちらぞ遅いか早いかで、長い別れに成りました」と母と娘は手を取合ひ、わつと一度に聲立てて、歎きは盡きぬ涙なり。俱に心も藏人が、袂をしほり居たりしが、傍をきつと、見付ける生首、「ヤア親人將監殿、是はいかに」と驚く藏人、若倉が立寄つて、「夫には段々申譯」「ア、こりやく娘、其云譯は此親に任せよ」と、藏人が傍近くにじり出でて息をつぎ、「ソレ其ごとく形をやつし、小

鳥を奪ひ、逃出づる折も折、夫とは思はず首かき切り、頭巾を取れば、姫殿。廻文の連判まで、我手に入るも天道自然。身も此通り腹切れば、敵討は五分々々。藏人了簡しておくりやれ」「ハア、何が扱、年來諫言申しても、用ひない父が一徹。日頃を思へば悪事の報い、何か遺恨を残すべき」と口は立派に云ひながら、色目に出さぬ武士の、心を計りて惟弘が、「ヲ、愁傷は尤なり。分けて大事は此小鳥」と、袋に納め紐引しめ、「忠盛公の志、謎をといたる此切腹、疎ならぬ平家の重寶、戻し申す」と手に渡せば、藏人取つて「實尤。今日は先主人が名代」斯くては果てじと立寄りて、義親の繩ときほどき、「イザく興へ」と勧むるにぞ、しをれながらも立上り、用意の輿に乗り移る時こそ有れ、館の外面に、関、貝鐘の音がまびすく、殿中響くばかりなり。竝居る人々大きに驚き、「思寄なや、コハいかに」と、見やる襖をさつと開き、陸奥冠者爲義公、緋緘のもえ立つ鎧、龍頭の金兜、虎の革の尻鞆太刀、采配取つて立ち給へば、數多の軍兵家の旗、白月毛の駒引立て、御出陣と呼はりく、廣庭に込入つたり。爲義辭まず馬引寄せ、ゆらりと跨り、「ヤアく惟弘、汝が與へし一卷に、敵地の案内くはしく知る。季仲が立籠る、城は江州甲賀山。是より直に馳向ひ、一戦に切摩け、法皇の宸襟を休んぜんは、此爲義が一舉に在り。御邊が忠死に義親の、御身の上も安堵せり。八幡殿より二代の家督、陸奥冠者爲義が此出立、未

來の土産に臨終せよ」と、諫め給へる骨柄は、適ゆしく見えにけり。皆々勇む其中に、手負の惟弘這寄つて、義親の誠繩、疵の口にしつかと巻き、「ホ、ウ適大將武者ぶりや。悦ばし悦し。御先祖太郎義家公、奥州へ進發に、父光任が見送りし、例を我も見覺えたり。イデ門出を祝はん」と、扇追取り押披き、「けふ出陣の御大將爲義公、抑十歳の初陣には、栗栖山に打向ひ、南都の衆徒の大勢を、終に攻伏せ追返し、花々しき御凱陣、君も御感の勸賞には、陸奥冠者を下されたり。扱季仲が要害は、甲賀山の嶮岨と聞く。前後の隊伍能く守り、弓矢持楯廻りをかこひ、山かけ谷かけ森の内、むらく鳥の立つ時は、伏勢有としろしめせ。扱陣取の第一は、風雲龍虎の習有り。春は霞夏は雲、簇と見まがふ山城の、麓の岡に屯して、深田を前に後は山、秋は田の面或時は、水鳥なんどのかけ引有り。軍は奇正を先として、敵の不意を打つ事は、只夜軍にしくはなし。六韜七書の教には、萬卒を憐みて、下知に應ずる其時は、たとへ小勢の味方なりとも、勝利を得る事疑なし。委しく申すは恐有り、八幡殿の軍略を、胸に覺えの爲義公、頓てめでたく凱陣を、待つといふ惟弘は、かゝる痛手の今はの時、君の長生末遠き、門出を見るが見納めか」と、苦痛をこたへ氣は張弓、やたけ心の爲義も、鎧の袖にもる涙、あやしの輿に義親も、別れを惜しむ涙の袖。若倉は將監が、首をかゝへて泣くくも、有りし次第をつどくくに、夫に見せて泣き

わぶる。「コリヤ〜娘、此親が切腹で、仇も恨も姫どし」「實も〜」と藏人が、早追ひ立てて
いづもの國、船場へ送る警固の役、馬上は勇む出陣に、駒を早める鞭障泥、ほんぱかしつたん丁
くく、蹴上ぐる鑑くり返す、冥土の門出と惟弘が見送り、見返る名將勇士、中に立ちたる
曙が、此世あの世へ別れ際、悦び有り、悲しみ有り、六つの蒼や六條の、館に哀を残しけり。

第三

熊野路は、海と山とを引受けて、漁夫は鯛釣る鰹つる、杣は樵りてたつぎとも、五穀なければ
春秋の、花や菓の畑主、庄屋組中が誘合ひ、都の使者の御出と、ゆふ暮時の閑しさ、袴羽織のか
た短、地に鼻付けて待つ所へ、早御入と披露させ、備前守忠盛の執權進藏人家貞、旅の用意の挟
箱家來引連れ歩み寄り、「いかに方々承はれ。此度白川の法皇頭痛の悩頻によつて、豫々當山
權現へ御祈り有る所に、或夜ふしぎの御靈夢、此谷陰に年ふる柳の太木有り、其柳を以て棟と
し、三十三間の御堂、都に建立有るならば、病平癒有るべしとの告に任せ、其柳を求めん爲、遙
遙と參著せり。方々に案内させ、今明日に穿ち取り、都に送らん其爲なり。急ぎ案内仕れ」と、
事の次第を述べにけり。皆々はつと手をつかへ、「是は〜、何事かと存じました。成程お尋ね

なされます其柳は、此先の谷間にござります。ナウ茂六「いかにもく、何かいとも知れぬ大きな柳、三十三間の棟には慥々。したがあ柳は何年ほだいか古い木にて、主が有るの化けるのと申す噂がござります」「チ、夫々、あの木をお伐りなさるとには、よつ程しゆらいがかよりませう。今日には何としてく」「チ、成程、左程の大木輒くは切取りがたし。併し今いふ通り天子の御用、杣人歩日雇などと、一山に觸をなし、手柄次第に人を寄せよ。いか程なりとも價に構ふな。夫とも農業拵の妨にならぬ様。勅願によつて一字の棟に成る大木、人歩に怪我過のなき様、随分いたはり心を付けよ。いざ我も見分せん、案内頼む」と和らかに役儀に誇らぬ藏人が、仁義を兼ねし詞なり。庄屋組中口々に、「ア、有りがたい御仰、かやうな事も所の賑ひ、随分と精出して、大勢人を掛けませう。まづ御案内申さん」と、庄屋を先に藏人は、柳が元へ急ぎ行く。跡には組中畑主、「サアく何でも急な御用筋、かけ廻つて呼集めう。達者にさへ有らうなら、錢金の擲取」「ホンニ角力取の入舟へも知らしてやりや。杣へは茂六、人歩へは此才兵衛が觸れませう。ヤレせはしや」とゆふ暮過、立別れてぞ急ぎ行く。爰に出雲の流人源義親が郎等、鹿島二郎義連は、謀叛に合體してけるが、荷擔の人数をかたらうて、軍用金をしこだめる、此山奥に身を隠し、夜は山賊の山道を、のつかくと歩み出で、「エ、今夜は何ぢやや

らそぶ付いて、素手ばかり引いてゐる。まん直しに「ぶく」と、火燵こつちり三服つき、きせるくはへて寐腹這ひ、人まつ蔭に小提燈、「くるぞく」と咽ずんばい、上足打つて待つ所へ、來かゝる男が頼かぶり、行き過ぐを、「コリヤく待てく、其火を借らう」と聲かくれば、立戻り透し見て、「何ぢや火をかせ。コレたばこの火ならならぬく。くはへぎせるは堅い御法度、火を借す事はマアならぬ」「ハ、ハ、ハ、そりや町中の事ぢやはい。此山中で何用心。小言いはずとかさいでな。云ひかけた無心、此儘でもおかれぬ。火が成らざ脱ぎおれやい」「ム、脱けとは何を」「ハテ知れた事、とつとと脱けやい」「ハア扱は聞及んだ岩淵とやらいふ剥ぢやよな」「チよう知つて居るなア」「チ、知らいぢや、此邊で噂の有る追剥、仕舞うてやらうと思つたが、今夜は大事の公用で、柳を切る人歩にいく、こんど逢うたら覺悟をせい」と、いかんとするを、「コリヤ待てく。われはよつ程骨が有るはい。われが様な丈夫な者は、幾人でも手下に付けたいのぢや」と、云ひつゝ寄つて帶をぐるく眞裸。「テモよい禪してゐるなア、夫もおこせ」と手を出せば、「ア、これく、おれや入舟風之助というて、小角力も捻る者ぢや、此禪はおれがもとで、やる事はマア成るまい」「ム、何ぢや、見事捻るか、面白い。力の有る者は望む所、力だめしぢや、何と一番出かけぬかい」「チ、角力なら好ぢや。何時でも相手に成るが、見事取るか」「チ、サ、

角力は知らねど押す」と、ひやうまづいたる懷手、「ヲ、おれも前髪は有るけれど、白山新三を見事投けた。此寒いに裸に成つての一番勝負、賭どくの約束せう」「ヲ、われが勝つたら其禪を褒美にやるは」「ヲ、合點ぢや」としことんく。「西は岩淵々々、東は入舟々々、名乗は濟んだ」と居合腰。やつとかゝれば岩淵が、ひよろ付く足元踏み留り、「まだぢやく」「ヲ、合點ぢや」と砂をもみ手に打拂ひ、ヤアくくと手合して、どつこいくと聲かけ合ひ、はねつ飛しつ四ツ手に入り、むさう返し腰もちり、相手はぬからぬそれ者の手取、四郎は無法の力足、透せば付入り得手に入り、押してくる身を肩すかし、コリヤくくあしに廻つてはね付くれば、岩淵胴骨打付けられ、起きも上らぬ高うめき。「ハ、、、追剝でも山賊でも、角力取の一徳には、裸に成るとこつちの得物。この花は入舟に下さる」と、著物も帶も引抱へ、跡をも見ずして逃け歸る。四郎ははふく起上り、腰をさすつて、「テモ扱も、むごたらしう投げをつた。コリヤくばりめ待ちあがれ。今一番取り直せ」と、呼べど叫べど山道の、がつくりそつくりだくほくの、脚引きすつて追うて行く、跡の山路ぞ物淋し。谷の水、松の風のみ音信れて、深山は猶も冴え返り、餘寒に雪もとけやらぬ、ましてや夜は猿の聲、おほつかなくも呼子鳥、鳴く音しるべにくる人は、横會根平太郎、お柳が情緣ふかく、母諸共に隠れ家も、早五とせと立つ月日、二人が中に設けたる、

縁丸に手を引かれ、鳥目の闇路とほくと、かたけし蹴に春さけて、雪の深山の山畑、岨を傳
ひてたどりくる。「コレく」と様、そちらは谷で危いぞや、こちらがよい」と右左手をひかゆれ
ば、「チ、よういうてくれたなア。誠や負うた子に教へられ、浅瀬を渡るといふ譬。晝は毎日權
現様へ参る道、夜はかいもく盲目同然。モウ月は出やしやつたか」「イエく、やつぱり暗いはい
の」「チ、幸ひ」と、春をおろして蹴取りのべ、畑の畦を爰やそこ、片手に探り手にさはる、蕪
の畑土大根、取つては入れつ蹴入れて、盗みとりめの闇なれば、「縁よ、そこに居るかよ」と、い
うては探る雪分ける、草の匂ひに夫ぞとて、春に入れたる獨活山葵、夜は人目もあらく吹く、
松の葉越に出る月は、廿日亥中の雲晴れて、山の端白く澄みのほる。「坊よ、誰も來やせぬか」
と尋ねればかぶりふり、「イエく、誰も來やしませぬ」「チ、よいく、誰ぞ見るなら知らせよ」
と、問うては探る畦々に、月はさせども知らぬは父、「縁よく、どこにゐる。人はこぬか、見やせ
ぬか。見るならちやつと知らせいよ」「アイ、あれく見てぢやはいの」「ヤアく誰が」「イヤ
誰でもない、お月様が見てぢやぞや」「ヤアくく何といふ、お月様が、ドレくく」と蹴
を杖、ふりあふぬけど眞の闇。「ソレ上から見てぢや」と指をさす、我子が詞は正直の、頭の上に
大磐石、大地にどうと平太郎、我身を打伏せくて、「ハアくく勿體なや恐ろしや。天道様

御赦されませく、赦させ給へ」と伏拜みく、目にもる涙を打拂ひ、「貧苦にせまり糧につき、纔の畔の作り物、農業の脂を盗む、天の冥罰立所に、稚子が詞を以て、天道より我を禁しめ給ふかと、今身に絆と思ひ知る。ハツアさうぢや、天に録なき人は生ぜず、地に根なき草ははえぬといふは、天地自然の道理なり。周の代には虞芮の民、畔を譲ると聞くものを。あさましの身の成る果。昔は北面に仕へし武士、横會根次官光當が、飢、弓矢は誰におとらねども、時世につれて心まで、深山鳥か苔猿の、餌に苦しむ世渡りは、是が次官が子や孫の、成行なるかと抱き寄せ、聲も忍びのむせび泣、子は辨へも「ナウとと様、何悲しうて泣かしやるぞ。おれもどうやら悲しい」と、膝にもたれて歎きしは、物の哀の至極なり。漸心取直し、「ハア、誤つたり我ながら、盗み取つたる春の内、此儘に捨置かば、枯凋れんも無益なり。翌は幸ひ、佛の忌日、持つて歸つて備へんもの。願望だに成就致さば、十倍倍にてお戻し申す。赦させ給へ」と押戴き、鎌をさぐりて指通し、水母に海老の道しるべ、「縁よ手を引け、歸らん」と、元來し道へさしかゝる、後へ戻る和田四郎、夫と窺ひ指足拔足、「畑盗人見付けた」と呼はる一聲恟りに、かたけし鎌を投捨てて、我子大事とかき抱き、こけつ轉びつ逃げ歸る。「ハ、ハ、ハ、よい氣味な。おどしてやつたりや恟りして、鎌を捨てて逃げをつた。エ、残り多い、ひつ捕へて眞裸、剥ぎむくつてこまそもの。今

夜は宵から出かけが悪い、是なと徳にしてこませ」と、春をかけたる蹴の柄を、臍に引かけ、「テ
モ扱も、蹴をかたけて手を放した、譬を見た」と打笑ひ、かたけてこそは三重歸りける。桶陀洛の、
岸を南にみ熊野の、九里八町の川端に、里離なる一つ家は、横曾根平太郎當吉が侘住居、老母
に仕へる暇には、日毎に三所權現へ、歩を運ぶ留主の宿、妻のお柳は獨子を、生し育てて五と
せの、春の半も冴え返り、深山の雪に降る雨の、しよほく髪に櫛入れて、撫でつさすりつ愛
盛、「コレ綠丸、じつとして結はしやいの。そしてとゝ様の迎ひに、坂口までいておぢや」と、い
ひ聞かすれば、「アイくくく、あのばゝ様のいはしやるには、けふは佛様の日ぢや、山へいた
ら花を折つてこいというてで有つた」「チ、夫も怪我せぬ様にいておぢや」と手を放すれば飛
んでおり、「アレ又雪が降つて來た」蓑よ鎌よと取集め、笠もちよつほり愛らしく、「雪やこん
こん霞やこんこ、溜れや小雪」走りぐくらに出でて行く。「コレくくく又とばついてこきやん
なや」と、立つて見送くる門口へ、先走が聲として、「都のお使者御出なり」と呼はらせ、進藏
人家貞、禮儀正しく入り來れば、老母も奥より立出でて、嫁のお柳も諸共に、手をつき敬ひ饗
せば、威儀を繕ひ上座につき、「此度當所へ立越えしは、忝くも白川の法皇の勅命、謹しんで能
く聞かれよ。過ぎつる年、法皇當山權現へ參籠の折から、叛逆徒黨の族、還御の道を遮る所に、

お柳とやらん、女ながらもかひくしく、御危難を救はれし段甚歎感、早速御褒美の使者参るべきに、法皇御不例によつて斯まで延引。それく」と詞の内、はつと家來が臺の物、二人が前に竝べさせ、「輕少には候へども、忠盛よりの志、頂戴有つて然るべし」と、慇懃にこそ述べにける。お柳は會釋も年だけに、老母は膝を摺寄せて、見れば黄金の一包、「是はく冥加もない、かゝる山家の埴生へ、お使者のお入り下さるとは、所の聞え、ナウ嫁女、是はそなたへ下され物、お受申す覺が有るか」「サレバイナ、とんと忘れてをりましたが、思へば五年跡の事、平太郎殿と夫婦に成つた其時しも、さのみ手柄といふ様な、覺てはなけれども、上々様の危き所を、俱々にお見つぎ申したばかりに、御褒美とは冥加ない。殊に夫も留守といひ、イヤもうやつぱり此お金は」「ヲ、それく、受けましたも固然」と、母諸共に押戻す。藏人大きに感じ入り、「扱てかゝる山中は、無骨とばかり存じたが、都に恥ぢぬ爪はづれ、老母といひ御子息の心底まで、嘸有らんと奥床し。我等進藏人家貞とて、忠盛が家臣、萬事心おかるよな」と、世に頼もしき詞の内、老母も扱はと手を打つて、「成程都で聞及んだ、忠盛卿の御家臣とや。絶えて久しき都の噂、思ひ出すも涙の種、わらはが夫は横會根次官光當とて、北面を勤めし武士にて候ひしが、同じ北面の武士武者所時澄といふ者と、弓矢の論の遺恨にて、夫の次官を時澄

が、討つて立退き月も日も、けふが即十七年の祥月命日。其時は平太郎も幼少にありし故、母が故郷常陸の國へ身退き、五年以前願望の仔細に依て、此所へ引越して、是なるお柳を嫁に取り、縁丸と申して一人の孫を設けしが、ナウ申し、其時澄こそ悴が爲には親の敵、討つに心はおくれねども、若し返り討に討たれなば、年寄つた此母、路頭に立つが悲しいと、仇に暮すも孝行故。此年月の憂き艱難、御推量下され」と、涙ながらの物語、藏人横手を丁ど打ち、「ハツア扱々始より由有る人とは存ぜしが、いかにも聞及びし横會根次官光當殿の妻子にて候な。某とても此外に、法皇の院宣を蒙り、次の宿まで参つたり。所用終らば都に歸り、忠盛へも委しく語り、お爲惡しうは計らふまじ。必時節を待ち給へ」と、聞くより老母も打笑みて、「世に有りがたいお詞や。シテ院宣のお使に、次の宿までお出とは、いか様な儀でござります」「サレバく、右申した白川の法皇、御不例と申すは頭痛の病、一天の主でさへ、かゝる御惱は遁れ給はず、諸山の祈和丹の典藥、いかな驗も見えざりしが、ある夜熊野大權現、三夜に續くふしぎの靈夢、法皇の前生を告げ給はく、先生は蓮花王坊と云ひし修驗者にて、三熊野に歩を運び、つひに當山に入つて身まかりたる、修驗道の奇特によつて、今日白川の法皇と生れます處、前生の其髑髏、柳の木の梢に留る、夫故頭痛の御惱頻なれば、其髑髏を尋ね求め、王城の東におい

て、三十三間の堂を建て、一字の下に彼髑髏、納置くものならば、忽平癒有るべしとの夢の告。さるによつて次の宿なる柳を切り、堂の棟に寄附せらるべき院宣なり」と語るにぞ、「扱は左様で候か」と、黠く母に驚くお柳、「スリヤあの柳を切崩して」サレバく、普天の下王土にあらぬ所もなし。今日中に切取らん其爲に、多くの人歩をかけ置きたり。平太郎殿には又重ねて」と、立上りしが以前の黄金、再び取るもいかゞぞと、見やる向ふの佛壇に、竝ぶ位牌に手向の露、いはぬ色なる捧物、「さらばく」と禮儀をのべ、供人引具し急ぎ行く、「扱々やさしき武士や」と、老母が見送る門の口、とつかは戻る綠丸、「コレばと様、とと様もモウ爰ぢや。コレ花折つて來ました」と、渡せば取つて、「ドレくくく、祖父様へ進ぜうぞ」と、悦ぶ母に勇まぬお柳、「オオそなたは何とぞしたかいの。俄に聲の色も悪う、目には涙が」「ア、いえく、どつこも悪うはござりませぬ」と、目を押拭び、「縁、戻りやつたか、つめたかろく。ドレ足洗うてやろぞや」と、圍爐裏の罐子水いらす、母は佛間へ、親と子が、鹽引寄せ取々に、櫓折りくべしるりの傍、添乳ながらの肱枕、したしむ中ぞわりなけれ。扱も横會根平太郎當吉、弓矢の業も隠れ笠、蓑には孫晨が藁を結び、老いたる母に孝の道、憂きを深山の苦筵、雪を凌いで立かへる。お柳はそれと見るよりも、「アレとと様が戻らんした。コレ綠丸、モウ乳を放しやいの」と、いへ

ど寐付のすやくいひき。母は聞付け立出でて、「オ、お柳よいはいの、よう温めてやらしやれ」と、いひつゝ庭に、「ヤレくく、けふは雪やら霰やら、嘸や足が草臥れう。幸ひ鹽も爰に有る、ドレ足洗うておませう」と、湯を汲入るれば、「ア、申し、わつけもない。私が洗ひます、お前はるろりへ」「ア、いや、此母が達者なりや、折には代つて参るけれど、山坂があぶないとして、厭うてたもる孝行。殊に權現様の誓には、一度參詣する者には、證誠殿の階を下り給ひ、三度禮をなさるけな。年月歩を運びやつたれば、權現様のお足を洗ふも同じ事。ナウさうぢやないかいの」と、母の詞も理の當然、「是はく、左様おつしやれば、御意を背くも却て不孝、然らば御免下され」と、差出す足を洗ふ内、表に立つてつくぐと、様子窺ふ和田四郎、蹶にかけたる番投げ捨て、「平太郎内に居やるか」とずつと這入れど見知らぬ顔。「イヤ氣遣ひな者ぢやない。是の息子は名にうてた孝行者、佛平太郎といふ噂を聞き、おれも親が有る故、孝行の仕様も見やうし、又女房のお柳は、こゝら一番のてんとれ、あんな美しいけん妻を、抱いて寐るのも孝行の徳ぢや。おれも孝行を見習はうと、來て見れば有らう事か、母親に足洗はして、夫でも孝行といふ物かい。見ると聞くとは鵝の背、あんまりで臍がくねる。ハ、ハ、ハ」と高笑ひ、笑ふも構はず平太郎、母の手を取りるろりの端、「たばこも是に」と押直し、「扱々世に

は物好^{ものずき}な人も有るものぢや。イヤもう其日暮しの平太郎、錢金^{ぜにかね}入れては得^え仕^しませぬ、本の足手^{あして}ばかりの孝行かと存じます」「ハ、、、讀^よめた、夫で今の様に、足洗^{あしあら}はして居^ゐたぢやまで。又おれが孝行いうて聞^きかそか。マア春は乗物で花見、綾^{あや}や緞子^{じゆんす}に毛蒲團^{けふさん}しかせ、二の繕^{ぜん}かの繕^{ぜん}かまほこ三つ、夫も骨の立たぬ様、藥研^{やくけん}でおろして進^{しん}ぜる。何ときつい孝行か」「ハ、、、そりやモウ親に窮屈^{きうくつ}がらせ、困^{こま}らすといふもの。とかく年寄^{としより}には何事も、氣儘^{きま}にさすが孝行。今足を洗^{あら}をとおつしやる、ハテ勿體^{もつたい}ないとは知りながら、そこを戻^{もど}かはす、云狀^{いひじやう}に付^つくのが、孝行で有るまいか」「コリヤ尤。そんなら婆^はさまが言はれる事、逆様^{さかさま}な事でも、用ゐるが孝行ぢやまで」「ハテ知れた事」「ム、よい〜。コレ婆^はさま、あのお柳は五年跡から惚^ほれて居る、貰^{もら}うて下^{くだ}はれ。コレばさま」と、思ひがけなき難題^{なんだい}に、三人顔を見合せて、惘^{あき}れ果てたるばかりなり。「サアどうぢやい。コリヤお柳、物を言はぬかい。返事^{へんじ}をせぬかいやい。ア、笑止^{せうし}な、平太郎が首が飛^ひぶも知れまいぞ」と惡口^{あくこう}存外^{ぞんぐわい}出はうだい。聞き兼て平太郎、「ヤアいはせて置けば様々の謔^{たはこみ}言^ご。主^{ぬし}有る女房に無體^{むたい}を云ひかけ、某^{たれ}が首が飛^ひぶとは何が何と」「ム、、、ハ、、、コリヤ證據^{しやうこ}を出して首にするぞよ」「チ、夫見よう」「見せいでは」と、門に捨てたる春提^{ふごひつき}け、「何と覺^{おぼ}え有^あらうがな」と、放^{はな}り付^けたる春^ふの中、山葵^{わさび}よ獨活^{うどぎ}よ土大根^{つちおほね}、嫁菜^{よめな}が手前母の前、差俯^{さしうつ}いて平太郎、誤^{あや}り入^まつ

たる風情なり。「ハ、ハ、ハ、天道は正直、此畑主が見るとも知らず、小びつちよと二人連。昨夜ばかりぢや有るまい、年々の取溜、代官へ引ずつて、法に行ふ。サアうせい」と、引立つる手に取付く母、お柳も今さら見すほらしき、夫婦が心ぞ切なけれ。母は中を押分けて、「マアく待つて下さりませ。常はずんど正道な者、かやうな事仕出したも、露命を繋ぐ糧ではない。あのごとく權現様を信心して、常燈明の油代にがなせう爲に、ふつとした出來心、暖になつたれば、順禮や道者衆の宿をする故、賄ひも出來まする、何かに不自由な山家住居、何事も年寄つたばとに免じ、御了簡下されませ」と、手を合せ詫びければ、「サイヤイ、そんな事で有らうと思つた。そんなら了簡してやらうが、お柳を女房におこす氣か」「サアそこでござります、あの様にまだ乳を放さぬ孫も有り、殊にちつと義理も有れば、どうも此儀は」「ム、夫もならぬか」「サアそこが御了簡。アノ世間には、首代の、イヤ過料のというて、金を出して命を償ふ品も有れど、マアあなたには、そんなさもしい金を取つて、了簡のなんのといふ様な、お心ではござりますまいけれど、年寄のくどくと、いうて見る様な物の様に」と詞のはしく、耳峙て、「何といふ、首代に金を出すか」「サア過料でどうぞ」と手を摺りて、詫びる傍から平太郎、
「申し、其過料と申して一錢の貯か」「サアよいはいの、此母次第に。ノお柳」「アイ夫々、

ば様のおつしやる様に、コレお前には留守の内、都のお人に貰うて置いた心宛「ハテやかましい。盗みかやきの分際で何の首代。口先でぬつべりこつべり。手短にお柳を渡せ」と立寄る足元老母は頓て、備へし包を没出せば、欲にぎろ付く黄金の包、取上げて、「コリヤ金ぢや、しかも黄金十枚とは」始めて驚く平太郎、お柳が呟く勅使の噂、片頬で金を見改め、「とうから出せばよいもの、首代とは不足なれど、是で了簡してこます」と、懷へしつかと納め、「エ、けたいな、えらう腹も減つたれど、次手に了簡してやる」と、邊を見廻しのつさのさ、心残して立歸る。跡を詠めて三人が、ほつと溜息つく中に、平太郎身を悔み、「非義非道忽に、天道免し給はぬ道理、母人女房面目ない」と、後悔涙の男泣。「チ、悔しいは道理々々。さりながら、武士の落目に切取強盜、恥に似て恥ならず、必無念におもやんな。またも神のひかへ綱、そなたの留守に都のお使者、佛に手向けて歸られしが、幸ひそなたの命の代り」「成程々々、只今お柳が物語、拙者も登山の道々、見馴れぬ京家の侍達、大勢の人歩を寄せ、柳の本に足場の拵へ。ヤア何や彼やで忘れてゐた、佛前へのお備は」「チ、どれくお飾りを」と、華足に飾る粟の餅、是も貧女が志、佛間にこそは入りにけり。お柳は添乳を漸と、軒端は雪の風寒く、餘寒を凌ぐるろりの火、お神酒の餘り燗鍋に、溫め入れてこてくと、盃のせる丸盆も、心有りけに携へ出で、

「ナウ申し平太郎殿、お前が日比の孝行が、神佛へ通ぜし故、思はぬ金を貰ふといひ、災難を遁るゝも、皆信心と孝行の徳。あの縁丸も成人して、お前に孝行仕やる様、あやからせて下さんせと、盃を指置けば、「是はく改つた事いやる。したがおればかりぢやない、そなたも随分長生して、孝行にして貰や」と、いへばほろりと涙ぐむ、顔をつくづく打守り、「是は扱、そなたは何が悲しうて、其目元の其涙は」「ア、いや申し、是見やしやんせ、縁の寐顔の愛らしさ、つい思はずに」「ホンニナウ、たわいもなう寐てるは。した縁ばかりぢやない、おれも山坂をあるいた上、色々と氣を揉んだりや、どうやら迎が來たさうな。ドレーツ呑もかい」と、丁ど受けてつと干し、「コリヤ坊よ、母上のお頼ぢや、とよが孝行にあやかれ」と、寐顔へちよつと戴かせ、「そなたも一ツ呑みやいなう」「あい」と取上げ押戴き、「ホンニ此様な、めでたいはかない事が又有らうか」「ヤア、はかないとは、何がはかない事ぢやいの」「さればでござんす、お前の留守に變つた咄を聞きました」「フンそりやどんな咄ぢや、それ聞かう」「サアまあ、あのあの、エ、つんと、ハテ云ひ兼ねる咄ぢやが」「何ぞ指合な事ぢやないか、母者人は奥になり、何のおれに隠す事。サア早ういやいの」と、いへども夫と云ひ兼ねる、胸の思ひは目にもると、涙見せじと身を背け、漸胸を撫でおろし、「アノナ、咄といふは外でもない。アノ谷陰に

生ひ立ちし、柳ななの一本ひときの其傍そばに、大木たいぼくと成つた柳の木と、女夫めうそに成つてゐるといな」「ムウ夫が何とぞしたかいの」「サアまあ譬たとひへていふ時は、柳の木はお前柳は私、かう夫婦に成つて居れば、取りも直さず連理れんりの中、お前に譬たとひへた柳の木は早佛果ぶつくわを得て、今人界にんがいに生しやうを受け、又女の柳は今に非情ひじやうの果くわを離はなれず、假かりに人間まじはに交りて、夫婦妹背いもせのかたらひに、一人の子まで設けしが、國王の御爲に、母の柳は切崩きりくづされ、消ゆる命は惜をしまねども、馴染なじみ重かさねし夫つまや子に、別るゝ事が悲しうて、此胸こを裂く様な、夫が悲しいく」と、語る聲さへかき曇る。平太郎何なんの氣も付かず、「夫は笑止せうしな咄うたぢやが、そなたは何の構はぬ事、其様に泣かすともよいはいの」「サア夫でもよう似たお前と私、あの子の寐顔みがんを見るに付け、身につまされて悲しさに」「ハテわつけない。モウくそんな咄うたは置いたがよい、どうやらおれも胸むねつほらしい。サアわつさりと、も一つ呑まう、北の方つぎ給へ。酒は愁うれの玉簪たまはやくき、今の様な哀あはれな咄うたは、熊野の浦へさらりく」さいつ押おさへつ汲くみかはす、妻が思ひは露つゆしらぬ、夫は肱うでを手枕てまくらの、うたとに夢や結むすぶらん。妻は傍あたを立退たちのいて、奥を覗のぞいつ立戻り、おづく傍そばへ立ちながら、「コレく申し我夫つまと、いへど寐ね付つきの高軒たかいぎき、風が持てくる斧のこの音、伐木はつぼくとくくちやうくと、木を伐きる音やこたへけん、お柳は身節みふしびつくびく、苦しき胸むねを押おさへる涙、じつとこらへて立寄れど、得もいはしろの結むすび松、

我は柳の縁子が、顔を詠めつとつ置いつ、「ハアさうぢや待てしばし、互に顔を見て居ては、中語るも面映ゆし。必ず夢とおほさすと、白地に聞いてたべ。ナウ我こそ誠は柳の精、雨露の恵に生育ち、かやうに夫婦と成る事も、一方ならぬ因縁ぞや。今餘所事に云ひなした、咄は皆互の身の上、先の生にて誓ひたる、契りを結ばん其爲に、假に女の姿と變じ、柳が本に待受けて、夫婦と成りしも五とせの、春や昔の春の比、季仲が鷹狩に、鷹の足緒のかよりし時、數多の武士に切崩され、既に枯れなん其時に、お前が一矢の手柄故、鷹を助けて葉柳の、枝に障りも、アレくく、又もや爰に散りくる葉は、我を迎ひに来るか」と、思へばやる方詮方も、なくく震ふ膝の節、押ししづめく、「其時の情の恩、送る月日も重りて、柳の花の縁丸、おとなしうなつたれば、乳がなくとも育つべし。成人の後々は、父の弓矢を受傳へ、潔い名を上げたも。コレ、母は今を限りにて、元の柳に歸るぞや。必草木成佛と、回向を頼む夫よ子よ。離れがたなや悲しや」と、いふ聲さへも忍び泣、忍ぶに餘る身のつらさ。「名残惜しやいとほしや」と、立つて見居て見聲を上げ、わつとばかりに伏轉ぶ。音に目覺す平太郎、「扱は夢とも現とも、聞きしは誠で有りけるか。何とて難面やるべきぞ」と、抱き留むれば一間より、老母も俱に轉出で、「様子は聞いたコレお柳、嫁女なう」と呼ぶ聲も、散りくる柳の葉隠れに、形は消

えて失せにけり。そこよ爰よと母と子が、尋ぬる音に縁丸、「かゝ様何處へいかしやつた」と、父が後に駈廻り、「かゝ様いなう、かゝ様なう。ばゝ様呼んで下され」と、庭におり立ち門に出で、尋ね迷ふを見るつらさ。父も思はず聲を上げ、「縁が母よ、お柳やい」「かゝ様いなう」「嫁女」と、聲をはかりに慕はれて、又も引かるゝ執著心、形はしをるゝ青柳の、母の姿とみどり丸、「ヤアかゝ様」と嬉しくも、立寄りすがれば「嫁女か」「女房なるか」と立寄つて、「非情の草木と云ひながら、情有ればこそ是までに、睦じくも馴れなじみ、一人の若を設けし身が、何とて振り捨て歸りしぞ。せめては母人を見送るまで、供に介抱してくれよ」と、託ち歎けば漸に、しをるゝ顔をふり上げて、「傳へ聞く、安倍の童子が母上も、丁ど我身と同じ事、一人の子を残し置き、信田の古巢に歸りしとや。夫は野干の年ふる身、我は元來草木の、歸る古巢の柳は今、伐崩されて枯柳、歸るといふは消ゆる身に、何とて形を残すべき。白河の法皇の御惱頻とて、都の使來りつゝ、我身を切捨て申すなり。斯くて姿は見えながら、もはや朽木も時を得て、一字の棟と成る事も、一つは妙なる法の縁、逢ふ事稀に優曇華の、花物いはぬ草も木も、王土に住めば是非もなし。今より佛果の身となるも、夫の先生柳の木の、佛果に連れし縁あれば、情の恩を報ぜん爲、一ツの筐を參らす」と、平太郎が手に渡し、「夫こそはかけまくも、白河の

法皇の前生の御頭なり。夫を手柄に御身の上、再び出世をなし給へ。必々縁が事、お頼み申し
参らす」と、夫の顔を見ては泣き、若を引寄せ抱きしめ、離れがたなき輪廻の繼、「アレ〜風
の音に連れ、柳の糸を切拂ふ、斧鋏がちやう〜、飢は爰に玉きはる、時こそ來れいざさ
らば、さらば〜の聲の下、姿は見えずなりにけり。不便や憂きをみどり丸、「かゝ様は又いな
しやつたか、コレかゝ様」と呼びたけり。かけ出では、「かゝ様なう〜」と足摺し、辨へしら
ぬ稚子を、膝に抱きて平太郎、「ナウ母人、我よりは此若が、愛著に引かされて、嘸や名残の惜
しからん。たとへ姿は見えずとも、柳は妻が亡き俤、今一度此縁に見せもし、我も見ましたし。
藏人とやらんにも對面せん。母人には此髑髏、佛間へ直し下さるべし」と手に渡し、「サア來よ
縁」と手を取れば、「かゝ様呼びにくのかや。おりやモウ乳が呑みたいはいなう」チ、道理ぢ
やく、可愛や」と、涙隠して二足三足、深山隠れの山寺に、入相告ぐる鐘の音、數へながらも
そろ〜と、探る足元見付ける母、「コレ平太郎、そなたは何とぞ仕やつたか」「ハア、いや何と
も『夫でもいかうと〜仕やる』コレばゝ様、とゝ様は目が見えぬはいなう」「ヤア〜そり
やマア何時から」「ハイ、さればでござります、一月餘り、ふと鳥目が發りましたが、斯くと申さ
ば嘸お案じ、お心に障らんかと、女房に云含め、是まではお隠し申したが、昨夜までは女房が

引取つて介抱して、ハア、いやく、お氣遣ひなされますな、ずんどよう見えまする」と、いひつゝ探るを見せまじと、思ふ心ぞ闇のやみ。「コレく」と様こちらぢや」と、手を引く孫を見る母も、涙隠して跡に付く。「ア、申しく、母様何にもお構ひなさるゝな。したがおまへ様も此坊めも、今夜から嘸便りが」「テ、そなたは猶の事、おれもがつくり力がない。孝行にしたもつたお柳、最一度逢ひたい禮も云ひたい。よしなき老の長生して、憂き事を見る悲しや」と、親子手に手を取りかはし、流涕こがれ歎きしは、理とこそ見えにけれ。外は二月の、雪空につれて寒さもいや増る、行燈の火を挑燈に、移し持つたる綠丸、蓑よ笠よと打著せて、「然らば參つてさんじましょ」「テ、怪我せぬ様に、綠よ手を引け」「あいくくく」あいろは見えぬ鳥目の父、杖は我子を力草、柳が本へとたどり行く。母は佛間の看經に、家の忌日も嫁が日も、俱に回向の發願以、鉦も幽に六字詰、「南無あみだ佛くくく」風も身にしむ黄昏過、心の鬼の和田四郎、晝の街の兼てより、夜は山賊の大膽不敵、何でも掘り出ししこためんと、大だらさし足窺ひ足、ぎしつく疊の物音に、「誰ぢやく」と聲すれば、「イヤ苦しうない、盗人ぢや」ヤアと恠りしながらも、立出る遠の母、「イヤモウ折角はひらしやつても、見込のない此内、了簡していで下され」「イヤコリヤばよ、おれぢや、顔見い」と、頭巾を脱けども、「見知らぬく」

「ハテ晝きた者ぢやが、見しらぬか」「ムウナニ、晝來たといやるからは、扱は晝のも」「ヲ、畑主
というたは嘘ぢや」「アノ、夫は」と驚けば、「へ、、、山家のとろくに似合はぬ、黄金十枚は
よい仕物、まだ臍くりが有るであろ、有りたけそこへ浚へ出せ。命は助けてくれうぞ」と、鯉口
鳴らしおどしける。「エ、口惜しい。夫と知つたら其時に、やみくとは遣るまいもの。平太郎
は戻らぬか」と、表を詠めつ奥を見つ、心をいらち身をあせる。「エ、直では出しをるまい、捜し
てくれん」とかけ行くを、そふはさせぬと取付く手先ふり放し、蹴飛ばし／＼のつかのか、納戸を
引出す古葛籠、あたふた明けて手にあたる、親子が著換に包んだ大小、鮫は鼠がまだ外に、御明
上げた釣おまへ、備へし髑髏を見て恟り、どこやらぞと髪立退きしが、打點いて、「コリヤばよ
よ、葛籠に刀が有るからは、浪人に極つた。あの晒頭は誰が首で、何の爲ぢや、夫ぬかせ」「イヤ
あれは大事の物く」「ムン其大事がる譯聞かう」「ヲ、あれはの、息子が出世する大事の物じ
や」「ム、何じや出世する、其出世が猶耳寄。イヤ一應ではぬかすまい、どす開かざるまい」と、
段平引抜き、「サア是ぢやが」と突付ける。「ア、これあぶないく」と、追廻されて踏み
はづし、庭へどつさり。「落ちてでも逃けても問ひ貫く」と、追詰められてかぶり振り、「ヲ、すだ
すだに刻まれても、言はぬく」「ハテしぶといひばり骨、いはせいで置かうか」と、命もあら

繩見付け出し、がんぢがらみにぐるぐ巻、見上ける燈籠の釣縄ほどき、結び付けたる猿縛り。「サア、ぬかせく、ぬかさぬか」と、いうては引つぱり釣縄に、しめ上げられてかよわき體、次第にしまる縛り繩、血筋赤らむ蔦梔、命の蔓で危けれ。「ハ、、、もがくはく。情の剛い根性から、痛い目を見るはい。下は滑の溜り池、氷の地獄ぢやサアぬかせく」と責せつちやう。老母は苦しき聲も出ず、降りくる雪に争ふ白髪、かもじほどけてばらくばら、齧にしたふ血の涙、見やる向ふに挑燈は、「なむ三寶、人影ぞ」と、繩を放せば眞倒、水の溜りへおちこちの、むざんなりける次第なり。遠の四郎も狼狽眼、表へ逃げんも一筋道、やり過して行かんすと、庵の庭に身を忍ぶ。斯とは知らぬ平太郎、案内はいつも我門に、常燈明の光さへ、挑燈の火にみどり丸、「コレと様、佛様へとほした行燈が落ちて有る」「ヤアどれく」と探寄り、「ホンニこりや落ちて有る。ふしぎく」と門の口、「母人、申し、漸今歸りました」「ばとさん、坊も戻つた」と、いへど答もあら笑止や、門の溜りに水之音。「綠よ、明りで見てくれ」と、詞の内に透し見て、「ヤア、あれくばと様が池へはめて有るはいの」「ヤアくく」と、と恟り敗亡、探り尋ねる手先へ障る繩引寄せ、「誠に母のうめき聲、コリヤ何者が所爲ぞ」と、繩を力に親と子が、漸にかづき上げ、「コレく申し母者人」「ばと様なう」と撫でさすれど、體

は氷と冷え切つたり。「こりや何とせう、どうせう」と、かけ出してはかけ戻り、立つたり居たり氣は半亂、虚空を攔むごとくにて、かけ出れば綠丸、「とゝ様はまつて下さんな」と、すがり歎けば縋りよせ、「エ、く目が明きたい開きたい。とり目は何の因果ぞ」と、母に取付き身をもだえ、聲をはかりに歎きしが、漸心取直し、「ハツアさうぢやく、水に溺れし體には、薬を焼いて溫むれば、再び息を返すと聞く。それよく」とて親が、指圖に養をかき集め、蠟燭の火を指寄せて、心を焦す、烟さへ、「若しも返らせ給はずば、是が未來の焼香か」と、口に念佛片手には、我身を添へて溫め鳥、蠢めく體に立ちかゝり、含みし水を、「ア、いやく、現在の親人に、足ではどうも。さはいへ水を出さずんば、忽苦痛を助ける爲、免させ給へ母人」と、戴きながら、ぐつと踏み出す濁水、手足をあかく其風情、嬉しとばかり耳に口、「母人、申し母者人、平太郎でござります」」「ばゝ様なう」と撫で廻し、肌身を添へて呼び生ける、心が心に通じけん、苦しき息をほつとつき、「平太郎か遅かつた。綠はどこに」と探る手に、「申しく、お心が付きましたか。コリヤマア何奴が此所爲、名はお聞きなされぬか」」「チ、何者とは、晝來た奴が」」「何とおつしやる、晝の奴とは。ム、扱は街で有つたか。モウくよいく、お氣を慥にナ申し、綠も傍にをりまする」」「チ、二人のまめなが嬉しいく。孫が顔ももう見えぬ。平太郎

さらば。孫よく、さらば」とばかり此世の名残、其儘息は絶えにけり。「ハア御臨終か、南無
 あみだく。縁よ可愛や、モウばゝ様も死なしやつた」と、大聲上げて取亂せば、縁もおろ
 ろ立騒ぎ、「ばゝ様いなう、ばゝ様」と、空しき體に打ちもたれ、辨へなみだ、親と子が心ぞ、思ひ
 やられたり。様子ををつくると和田四郎、後に立つてせよら笑ひ、「ハ、ハ、ハ、ばゝめはくたば
 る、爺めは眼がつぶれたな」と、聲を聞くより平太郎、「さういふは晝うせた街よな。へ、有り
 がたい忝い、母人が是討てと有る手引なるか。縁よとよに引添うて、サアくこい」と身繕ふ。
 「コリヤやい、あの晒頭は大事の物ぢや、われに出世さすとぬかした故、おれが出世をせうと
 思ひ、様子をとへどぬかさぬから、あのざまにしてこました。うぬも小悴が不便なら、有りや
 うにサアぬかしあがれ」「何とぬかす。うぬ晝の金に味を得て、ようもく母人まで、胴欲な目
 に逢はしたなア。縁よ刀を取つてくる、此手を引け」と行く先に、立ちはだかつて、「動くまい、
 其大小は引つさらへ、爰におれが持つてゐる。是が欲しいか、ほしくばサアぬかせ。ぬかさど
 はぢや」と引抜く大だら、突付けく閃めく刃先、目前は見えぬ眞の闇。「怖い」と縁丸、
 刀に恐れ遡廻るを、引摺んで小脇に抱へ、「此小びつちよからさいなもか、但しはぬかすか、サア
 何と」と、人質取つたる手詰と手詰。「とゝ様怖い」と悲しむ聲、我身にこたへ肝先へ、突通さ

ると思ひ子が、命大事と手を合せ、「聊爾せまいぞコレ申し」「そんならぬかすか、いやなら突こ
か、刺るか」「サア／＼申し、どうぞ憐れを」「イヤならぬ。助けてほしくば早ういへ」「サア申し
ます」「サアぬかせ」「エ、／＼目が明きたい、目が明けてほしいなア。南無權現様。お柳やい」
「とよ様なう」と泣く縁。「おとほね立てると串刺ぢや」と、鋒指付け「サア／＼／＼。どうぢ
やく／＼」とせちがうたり。叶はぬ所と平太郎、「申し／＼、憐れはどうぞ助けてたべ。何を隠さう
あの御頭は、白河の法皇の觸體にて、渡らせ給ふ」と皆までいはさず、「モウよいは、つい一口
にいはると事を、よつ程儕もしぶとい奴、ソリヤ餓鬼めをこます」と投げやれば、親子が嬉し
さすがり寄り、溜息はつとつく空に、烏の羽音二聲三聲、雲間をさして飛んで行く。其隙に和
田四郎、觸體を小脇にしたり顔、「白狀をひろいだ褒美、是を食へ」と切り付くる。かい沈んで身
をかはし、利腕搦めば、「コリヤどうぢや、うぬが眼はいつの間に」「チ、開いた段か、蟻の這ふ
まで見えるはやい」「そんなら生けては」「合點ぢや」と、はすみを打つて引かたけ、池の深みへ
頭轉倒、直に刀を脇ばさみ、尻引からけつゝ立つたり。「とよ様強う成つたの」と、いき／＼
悦ぶ縁丸。「コリヤ／＼坊よ、大切な此觸體、大事にせよ」と、しつかと渡す後の方、されども
我武者の和田四郎、這ひよつて又一打、「まつかせ」受けたる鏢のほろ。「かう目が明けば百人

力、山賊ふぜいの儕等に、刀を當てるは刃の穢、うぬに似合うた蹶の刃先、老母が敵觀念せい」と、打つてかゝるをはつしと受け、「ヤア身を山賊とは片腹いたし。源義親公に譜代の家臣、鹿島三郎義連、此程までは都に在りしが、季仲の謀反に組し、軍用金を集めん爲、山賊夜盜は假の渡世、和田四郎が手にかゝると思ふな、源氏の武士が鋒に、苦猿めらが命の宿がへ、一々そつ首竝べん」と、廣言たかく付け入るさそく。こなたも弓矢は手練の若者、受けつ流しつ切結ぶ、鎬を削る吹雪の空、雲交りの雨の足、踏みすべれば踏み留り、組んづ轉んづ挑みける。平太郎は多年の誠、神や力を添へぬらん、切伏せく乗つかより、「縁が爲にも當座の敵」と、指添渡せば抜き持つて、こゝをちよつりかしこをはつり、松の木丸太の手斧打、大の男をへつり切。「よいはく」とて親が、とどめをぐつと指通し、「嬉しや敵は討つたり」と、死骸を池へ踏落し、悦び勇む親と子が、暫しは息をつぎゐたる。既に更闌け靜まりて、影が有らぬか縁が母、「ナウ平太郎殿、今母上の御最期に、苦痛有りしは先生の、業苦を見せしめ給ふなり。御身多年の孝行と、信心の功德により、月日の兩眼明らかに、敵を討ち給ひしも、大權現の神勅なり。此事疑ひ有るならば、肌の守を見よく」と、いふ聲ばかり聞ゆるにぞ、「實々ふしぎは我兩眼、いまだ八聲の鶏よりも、鳥の鳴く音を聞きしより、ふつと目の内涼しくて、眼前敵を

討つたるも、偏に神の加護なるか」と、懷中の守より、牛王取り出し能く見れば、數多の鳥のかけもなく、「扱こそ大靈權現の、不思議を見せしめ給ふか」と、肝に銘する折もこそ、又も羽音は悦び鳥、飛連れく、目下開きし紙は忽に、元の牛王と成りにける。かゝる奇瑞をみ熊野の、牛王の威徳末の世に、門戸に押して盗人を、防ぐ守ぞ有りがたき。早東雲の街道筋、木遣はやして地車の、轟く音ぞ勇ましや。「和歌の浦には名所がござる、一に權現二に玉津島、三にさがり松四に鹽釜よ。ヨイくヨイくく、アリヤ、コリヤ、よいとな」揃のゆかた染頭巾、件の柳を引きおろし、修羅にかけ手木にかけ、漸爰に來りしが、俄に車地に据り、ゑいや聲して人歩ども、入舟が木遣でも、後へはすさり一寸も、先へ行かぬぞ不思議なる。警固の武士進藏人、心に點き、「思ひ當る事こそ有れ、急くなく」と制する所へ、身拵して平太郎、縁を連れて出で迎ひ、仔細は夜前の對面に、老母が身の上増語り、「扱こそ此木の動かぬは、目前親子恩愛の、別れを惜しむと覺えたり。妻が靈をもいさめる爲、何とぞ網を此俵に、引かせ給はらば、有りがたからん」と願ふにぞ、「實尤の御頼、何か違背候はん。左様ならば此柳、新宮の濱前まで、後は海手を流さん」と、錦の袋を手に渡し、「御頭を是に包まれて、平太郎殿は一子連れ、後より上り給へかして、我は先立ち法皇へ、此趣を奏聞せば、御身の願ひ立所に、

横會根の家を引起し、父の敵時澄、折を以て某が、宜しう手引仕らん。一刻も濱邊まで、イザ御用意」と勸むれば、「残る方なき御懇情、忝し」と一禮のべ、「用意とても此儘」と、縁諸共立ちかより、木やり音頭は父が役、かざす扇もしをれ聲、「むざんなるかな稚き者は、母の柳を都へ送る、元は熊野の柳の露に、育て上げたる其縁子が、ヨイ／＼ヨイ／＼／＼、アリヤ、コリヤ」「こりやおれがかゝ様か」と、綱引捨ててわつと泣き、「最一度乳は吞まれぬか」と、縋り歎けはてゝ親は、涙に聲もかれ柳、枝に流るゝ血汐の涙。是や目前哀別離苦、動くも不思議はよきとの、草木心有ればこそ、引けばひかるゝ恩愛の、孫よくゝとゆうべまで、いとしがつたる老母さへ、今は子知らず親知らず、道の街に葬らんと、かき抱きたる孝の道、忠義に厚き藏人が、諫めて歸る都の土産、柳と柳と契りたる、連理返りや楊枝村、女夫坂とて今も猶、いひ傳へたる物語、憂きをみ山や三熊野の、柳の棟の由來は實、此因縁と知られたり。

第四 道行親子の友衛

爰に哀をとどめしは、綠丸が父上なり 妻にも憂きをみ熊野の、谷の柳のいとし子を、後に殘して消え失せし、母の柳も今ははや、都の方へ引く牛の、棟となるも法皇の、詞も重き親と子

が、御頭を包みさし荷ふ、肩と肩とに置く霜の、白き髑髏を道連に、母の棟の後慕ひ、都の空へ
と思ひ立つ、心の内ぞ物憂けれ。比は如月末つかた、まだ山々に消え残る、雪はあれども母と呼
び、妻とも呼んで青柳の、枝葉も俱にちりぐの、今は筐の緑丸、思ひ出しては立ちどまる、住
家を後に紀の路の海も、はてなし坂の松檜、杉の木立にむら烏、かはいくと鳴く聲も、我が
哀を友泣に、すよめ伴ふ稚子が、石を拾うて石なご礫、打つや現かうつとりと、父は歎に氣も
閉ぢて、そとろ心のけらく笑ひ。されども髑髏は大事ぞと、かたに引かけ先に立ち、「都へ
還御の御幸道、御先を拂ふ警固の武士、横曾根次官が一子平太郎が御供申す。車は我が肩車。
ハ、ハ、ハ、思ひ出でたり、漢王は李夫人の別を悲み、甘泉殿の夜の床、夫人の姿を、晝にう
つし、九花帳の内にして、反魂香を炷き給ふ、其俤は有りながら、物を言はねば笑ひもせず。
ましてや我も其の如く、妻は非情の柳の精、あゝ心なやつれなや」と、往來の袖にすがり付き、
憂き事の數々を見給へや人々。春は梢の花とのみ、心を寄せて短夜の時鳥、雪見草淺澤の杜
若、あやめ卯の葉も枯れ失せて、螢もうすく、かちこ顔なる我が涙、落葉時雨に濡れ初めて、
我ながら恥かしや。百夜千夜のなじみかや、谷の柳の年ふりて、まして雪霜厭ひなく、一夜を
待たで消え失せし、妻故に物狂ひ、あなたへ走りこなたへ走り、「アレくくく妻は爰に」と指

させば、俱にすがりて綠丸、「かゝ様戻つて下されなう。コレかゝ様」と聲立てて、呼べど叫べど其かひも、なびく梢は吹き亂れ、物もいは根の苦むしろ、木の根を枕に親と子が、疲れ臥すこそ哀なれ。實恩愛に、ひかれくる、母が姿は幻に、「ヲ、道理なりさりながら、さほど心を亂されては、綠も何となるべきぞ。最早心を取直し、とくく都へ入り給へ、道の案内」とゆふしでの、神隠れして失せにけり。親子はふつと目を覺し、ふしぎと見れど、佛は、草葉に残る露ばかり、夢か現かいつの間に安部野の道も遠里や、小野の古跡も早過ぎて、難波の春邊あたかに、野もせ堤にさいたづま、未央柳の綠丸、さきに立ちては打まねく。跡には父が呼ぶこ鳥、空には越に歸る鴈、今ぞ都の雲に入る。鳥羽の近道はよきどの、見えつ隠れつ教へ行く、人こそ知らね神垣の、大内山にぞ三重著きにけれ。人はいざ、苦は色かへぬ松原を、引きもちぎらぬ物詣、六角堂の御緣日、往來の人を拂はせて、進藏人家貞、跡に續くは横會根平太郎常吉、綠丸諸共に、昔に返る花の袖、肩衣袴大小も、さすが内裏の北面に、仕へし父が本領に、今日安堵の參内遂け、打連れ歸るぞゆゑしけれ。「ナウ藏人殿、法皇の御頭は先立て差上げ、卅三間堂の棟上も、早明日と承る。某も熊野にて別れたる老母が追福、昨日までに明け候へば、不淨を拂ひ服を改め參内し、横會根の家を起すべきとの綸旨頂戴仕り、以前の武士に返る事、偏に

貴邊のお取成。是より普請の場に立越え、忠盛卿へも今日の首尾、申上げなば嘸御安堵。此上ながら一ツの願ひは、父が敵武者所時澄、年來の鬱憤散する時節と存すれば、此の儀も宜しう御斗ひ下されよ」と、頼めば藏人打點き、其儀も主人忠盛へ、達て願ひ候所、右三十三間堂御普請の其間は、法皇始め奉り、忠盛も、精進潔齋、其上に非常の大赦を行はれ、罪有る者の命まで御赦免有るも、彼の堂事故なく成就あらせんと結構。何事も落去の後、此藏人が指圖して、御本望は受合ひ申す」と、事を分けたる家貞が、詞を聞いて「實尤。何かの事はともかくも、貴邊の心に任する」と、互の挨拶退屈して、「コレと様、かゝ様の柳の木に逢はさうといはしやつた、こんな美しいべと著たのを、かゝ様に早う見せたい」と、悦ぶ顔を見る父は、胸までぐつとせく涙。心を計る藏人家貞、「チ、しばらくしや健氣にも、出世の身を悦んで、見せたいとは自然の孝行。則柳の枝を以て、一千一體の佛像を刻まれ、彼堂に納め給ふ大願、枯れたる木にも花咲くとはかやうの道理。ヤア何かいふ間に時移る、いざ同道」と打連れて、急ぐ卅三間堂、普請場さして伴ひ行く。跡へしとく四枚肩、揃への看板醫者乗物、人まつ蔭に昇き居ゆれば、町とは見えぬ絹被、婢が付く鋳乗物、是も木蔭に立てさすれば、出迎ふ多熊法眼、こなたは忠盛の御臺所、池殿御前立出で給ひ、「是はく能い所で逢ひました」「ハッ成程、拙

者も是より直ぐお館へと存する所。シテ彼方の様子は」と、小聲になれば、「さればいの、先達て
 の療治によつて、右の姿に仕課せしが、マア聞いて下さんせ。腹が立たうか立つまいか、忠盛
 殿の種を孕み、五日跡に軽い産。しかも遅い男の子、血の上の事なれば、目廻でも出ようか、
 悔りでも召されうかと思ひの外、常よりは結句氣合もよく、あの手ではいかぬ故、外に仕様が」
 「ア、成程。又其上は我等が祕方、家の祕薬を一ぶく吞まさばころり山椒、産後の上目まひも見
 せずついべたく。法眼きつと請合々々。したが大切な薬料、謝禮には金子百兩、御合點か」
 と、弱身へ付込む欲頼は、疫病神より醜し。御臺は點き、「ソリヤ合點、夫に限つた事かい
 の。自が胸のほむら、イヤアノ癩さへ直る事ならば」と、邊の人目を憚りて、夫といはねど
 吞込む法眼、「然らば明日お見廻申す」「そんなら必待ちまする。幸ひ明日は御堂の棟上、忠盛様
 の留守の内」「サア夫も合點。今日は六角堂の縁日、随分匕の廻る様、參詣致す。シテあなたに
 はお下向か」と、目と目でたくま法眼は、乗物釣らせ別れ行く。跡を見送る池殿の、心はしら
 ぬ、娘の、衣江は中にもべれんそう、「此間は祇園女御のお安い産のお禮參り、清水から六角堂、
 御深切な御臺様、夜晝お伽のお氣ばらし。ナウおらん殿、ちとおひろひもよかるぞや」テ、それ
 それ、片詰つた屋敷を出て、町々を歩いたりや、厚鬢男をたんと見て、目の正月をしたはいの」

「イヤ厚髪あつげんより惣髪そうがみの法眼殿ほふけんどの、此おいやは氣に入つた。苦味にがみの走つたあの顔しやくが、癢かゆにはずんど妙樂めうらくやら、御臺様おつたいの相醫者しやぢや」と、様子しら齒つみしやうぐちが追蹤口しゆんぐち。池殿いけどのも打笑うちわらみ給ひ、「いか様さま、心を晴はらす爲ためにそろ／＼歩かちをひろはん」と、のたまふ折せから向ふより、雙紙さうしの鑓やりに蘭草履らんそうり、ふりかたけたる一文奴いちもんやつこ、子供童わらべに囃はやされて、「彌正平やしやうめく、京きやうの町まちの彌正平やしやうめ。振つたる鑓やりは何々、羽熊鎌鑓はぐまかまやり大鳥毛おほとりけ、小鳥毛こどりけ。花はなの國入くにいりしつかとせい。合點がてんだくまつかせろ。文ふみの取りやり、抜ひいたりさいたりせまいか。晩ばんの泊とまりは呑のんだりはつたりしてこめさ。是も戀路こひぢの手管鑓てくだやり。サアく鑓やりはお望次策ぼうじさく、持鑓もちやりだて鑓やりむしやくしや鑓やり、やりばなしは家いへの藝けい。臺笠立笠雁たいがつがんがさまで、振り分けて、御覽ごらんに入る。鑓やり先達者さきだつしや女中にようちゆうの氏神うぢがみ、見てやりなされ」と出ではうだい、口合交くちあひまじりの前口上まへこうじやう、物見ものみだけい、婢はした、「アレ申し評判ひやうはんの彌正平やしやうめ奴やつこ、御臺様おつたいへのお慰なぐさ、所望しよぼう々々」と立ちかゝれば、おつと心得こころえたんほの底そこ、口くちを叩たたいてうかれ歌うた、「振れくふり込めさ、ふり込めくさ、お先さきを拂はらうてあればさ、アリヤンリヤリヤ、コリヤンリヤリヤ、いてさヨイ、行列ぎやうれつ揃そろへてほつ立てろ。行くもヤレサテ、通ふも忍しのぶも亂みだれ、風かぜが吹ふくづら、追風おひかぜが、連れてくサツサ、縫ぬふてふのサツサ、我里わがさとの花はなの詠よみめん、投げかけゆりかけ、しとんとんくしとんとんく、しだれ柳しだれりゆうのソレしだれ黒くろじゆすの帶おび、ゑいやらさらさく。とよんととんくとう參まゐろ。投げかけゆりかけ、しとんとんく

しとよん、ソレく、しだれ柳のしだれ黒じゆすの帶、きりふとしやんとく、結びしめたる。
 ヤレ扱ナ、花は九重、櫻しなぐ、彼岸櫻や糸櫻、君は楊貴妃壺釜普賢ぞ虎の尾桐が谷、ふけ
 んぞとらのを桐が谷、君は楊貴妃壺釜ふけんぞとらのを桐が谷、吉野初瀬の花の盛エ。アレ
 アレくあのお供の擔けた御長なぎなたは誰が御長なぎなたぞ。あれこそ姫の御長なぎなた、
 草履取には可介可内出來助出來平、草履賣るのは此彌正平、彌正平く、花見辨當丈夫なかど
 うぢや、そこに油斷は少しもござらぬ、行列崩すなとお先の女中、被衣姿でしやなくくや。
 お上臈が見ゆる。やはくござれ、呂白傾城、色の盛りは起請まで書いて、其處に如才は少しも
 ござらぬ、粹なきまりは中居の手管、横に帶してしやなくくや、お上臈が見ゆる、やはや
 はござれ。賽の河原の地藏尊、櫓の上より駒引寄せ、どんぐわらり、ちやんぐわらりと乗つた
 るは、めざましかりける次第なり。閻魔大王三途の川を、笠かぶりかたむけて逃けらるよ。お宿
 はどこぢや、山の手く。ハッアはいや徳利かななべ地獄世界に著きにける」ヨイヤくと見
 物は、拍子に乗つて歸りけり。娼達は口々に、「みだい様御らうじたか、テモ面白い見物事。ソ
 レ侍衆、お足をたんとお引出に」と、いふに彌正平、「ア、申しく、お足はきなかも取り
 ませぬ、お足よりはお足にめす蘭草履、御めいくに一足宛、お買ひなされてやはくと、お

履きなされて下さるが、代物纔八錢宛「そんなら求めてやらうか」と、立寄れば、「申し、六角堂へ大願有る故に、我等が手づから履かして上げるがお観音への御奉公。マアかう召させますればお女中方には、達者な男を持つが奇妙。たとへ色事でしくじり有つても、第一足の上らぬが佛方便、はくも後生、履かるゝも五障、三従の罪を滅する草履の威徳でござりまする」と、いひ並ぶれば、「テモ扱も、耳寄な草履ぢやないか。サアくはかして下されと、脛もあらはに履く足の、白い衣江が尋常さ。次は鐵平おいがや跟、黒う太いはおらん殿。水仕のお龜が足の甲、十文に餘るは中居のお杉、皆夫々に履きかへて、「扱てもしつくり心地よい、豆の痛が直つた」と、笑へばみだいに打笑みて、「是へも持て」と詞の中、「ナイくく」と蘭草履、「恐ながら」と召しかへさせ、後ずさりしてかつつくばふ。供の侍「夫々」と、價を渡せば、押戴き押戴き、「大勢の附々故、手間入らずに賣切つた。さらば是から一休。ちつとお寄りなされませ、我等が宿は此園、鍋にも釜にもコレ此炮烙一つ、悉皆猫の子同然ぢや。そんだいなんほ寐とほけても、途に迷ふ氣遣なし。薬屋の雨は出にや知れぬ、果報は内で一寐入。さらば閉帳」小家の戸に、筵垂れつゝわぶといふ、住家こそは入りにけれ。こなたもいざと夕日かけ、「男の卒都婆小町ぢや」と、どつと笑うて乗物釣らせ、池殿御前は御歩路、打連れ館に歸らるゝ。天に不

時の風雲有り、人にも不時の煩ひを、心に工夫の多熊法眼、歩より爰に立歸り、乗物先へ昇居ゑさせ、家來を近付け呬けば、畏つて小屋の内、とつくと窺ひ、「成程々々。彌正平が住家と相見え、能くふせて居りまする」「ム、幸ひく。ソレ爰へ呼出せ」と、聲より早く立かゝり、「彌正平御用が有る、あれへ出ませい」「出をらう失せい」と引出され、あら立てんも仔細は知らず、只ハツくといひ引きすられ目通に躡り、「御用が有る、罷出ませいとござる故、罷出ましたが、シテ召しまする各様方は」「尋ねて汝が何にする。用が有る、つつと出をらうさ」「ナイ」「夫へ出ませい」「ナイ」「いやさ出をらぬか」「ナイ」「早う出ませいく」「ヤイく、口々にわめいてうろたへさするな、彌正平そこへ出よさ」「ナイ」「呼出すは別儀でない、無心が有る聞いてくれうか」「ハア、見ますればお歴々様、彌正平めに御用とは、先いか様な儀でござりまする」「聞いてくれうか」「身に叶ひました儀でござらば」「聞いてくれうな、ソ、そこへすつと出よ」「ハイソレ」と這出づる。ソレと一聲相圖の詞、二人一度に「捕つた」とかゝる。「まつかせ」居ながら膝車、續いてかゝるを小手返し、どつさりころりと打付けたり。四人が互に先後手、左右にかゝれば身を固め、はつしくと急所の當身、ころく轉んで「ひいひい」隙かさず法眼腰刀、討つてくる身を拔合せ、受つ拂ひつ上段下段、いらつて掛る多熊が刀、はずみを打つて打落し、

切先反らして、願へ、突付けく、差付けられ、思はず跡へたぢくく、「待てく、彌正平手際
は見えた。刀を引け」「サア」「サア引け」ぢりくすさつて眼を付け、「何意趣有つて此狼藉。身
に覺ないからは、どなたでもどいつでも用捨はないぞ」「ホ、ウ、適々。其手練を見よう爲、いや
はやく驚入つたる今の勳。彌正平、無心とは別儀でない、身どもが家來に抱へたい」「何が
何と」「イヤサ身は多熊法眼というて、平家の太將忠盛公へ出入る者、此ごとく帶刀致せば、長袖
ながら、武士といはんに頭振はふらじ。仔細有つて力量有る者を望む故、只今の狼藉、見所有者汝
が手練、彌正平、奉公してくれまいか」「ムン抱へ様が面白い。成程奉公仕りませう」「してくれ
うな」「いかにも家來に成りませう」「ホ、早速の得心満足々々。切米は追つての事、當分の拵
料、金子十兩認め置いた、汝が手形印形せよ」と投げやれば、押開き讀下し、「其日暮しの一文
奴、印形とては持合さず、印は斯く」と指つんざき、しつかと居ゑたる血判見て、「出かしたく
適氣轉。此上は違變なく彌主従、悦ばしよ」「ハア、拙者も安堵仕る」と、金子の包を懷
へ、「お納めなされ」と落ちたる刀、取つて渡して一同に、鯉口ちやんと納りける。羽繕ひして法
眼が、「乗物參れ」と呼はれども、四人残らず生兵法、彌正平くつくく吹出し、「ハ、ハ、ハ、ハ、尻引
からけた亡者達、六道の辻で草鞋錢、直切つて居らるゝ最中ぢや。エ、主人の傍でぞんざい至極。

さらば行儀を直してやろ」と、一人々々に死活の手際、性根付けられむつくく、起きて見合す顔と顔、砂打ちばらふ面目同士、彌正平が名對面、「今日よりも傍輩づから、以後は萬事を引廻し」「成程下拙は入口八兵衛」「身どもは六助」「又内吉平」「互に別懇々々と、挨拶取々乗物へ、多熊はしづく乗移れば、直ぐに昇出す四枚がた、お草履「任せ」と彌正平が、後に手をふる腰をふる、主をとり毛のふり仕廻、目見えの晴と蘭草履、足を揃へて三重歸りける。六波羅は、都の巽鹿鳴草、紅葉かつ散る山館、忠盛卿の北の臺、池殿御前の介抱に、祇園女御の御安座、けふ髪垂の規式の中、姉達が取々に、産後の補藥煎じ様、常にかはりし違例とて、看病等閑なかりけり。「進藏人家貞が女房若倉お見舞」と披露の聲、寢所にかくと傳へてや、池殿御前しとやかに立出で給ひ、「珍らしや若倉、近うく」の御挨拶。ハット手をつき膝摺寄り、「此程はお次までお見舞は申せども、女御様の御病架へは、あなたより外餘人はお除けなさると聞き、御容體の伺ひも人傳の噂のみ。御前様にはいかいお氣もせ、御苦勞様や」と會釋する。「ヲ、夫は奇特やようこそく。したがナウ若倉、尊きも賤しきも、おなかにやゝを娠しては、姫ごぜの身の一大事、何とぞ御産も安かれと、清水の觀音様へ祈り申し、御寢所には燈明を掲げ立願せしに、其利生にや其曉、御産も安うなされし故、ヤレ嬉しやと思ひの外、例ならぬ御難病、人

に逢ふを恥ぢ給へば、お伽には自ばかり、ぬまで遠ざけて、中々お傍へ寄せ給はねば、折角見舞に上りやつても、よもや逢ひはなされまい。上りやつた様子は自が云ひませう。大儀にもこそ有れ」と、にべなき仰に猶すり寄り、「成程御難病の様子も承はりました。私も數ならねど、お家の執權藏人が女房、何事もお心置なく、御用を勤むるが家老の役。大切な若君様、御誕生の折から御前様に成りかはり、産家のお伽何かの事も承はらいでは、夫が手前もいかど。ナ申し、左様でござりますまいかな」「サア、いやる所は尤なれど、今いうたを何と聞きやる。常體の産家なれば、俱々伽をして貰へど、とかく人に逢ふ事を恥しう思召せば、心を明し合うた自、夫で餘人は一人もお傍へやらぬはいの」「サアそこでござります、お前様は御本妻、女御様はお妾、其お妾に御男子ができたれば、どうしても本妻様が怏氣嫉妬の心が有つて、ひよつと毒藥、毒藥などといふ様な、左様な事ではござりますまいけれど、世間の口には戸が立てられぬと申せば、お前を惡様に噂さすも氣の毒、何とぞ今宵は私が代つて」「ム、何といやる、自が怏氣で毒藥をもるとは」「サアお前様に限つて左様な事はなけれども、世間の噂には色々、ない事まで申すがならひ。殊に忠盛様には法皇様諸共、三十三間堂御普請の其間は、精進齋故、お館へはお入もない筈。多熊法眼といふお手醫者ばかり、是も忍んで參るとの事。さすれば

人が疑ひまするも、尤かと存じますはいな」「サイノ、其法眼は産前産後の名人、手負に譬へし産婦の療治、自が頼んでかけて置いた。夫程に疑はしくば、御寢所へ同道して、女御の姿を直に見せう。今いふ通り、人に逢ふを恥しがり、衣を被いでござるはいの。自も此襦、顔を隠して問ひ音信。そなたも襦をかづいておぢや」「アイく、然らば左様」と立ち上れば、池殿御前先に立ち、「ホンニ次手に和子の顔も見せませう。毎夜の夜泣で迷惑をするはいの」「ホンニ左様に承はりました、いかい御難儀でござりまする」「サアく、お出。コレく、必ず顔を隠す事忘れまいぞ」と打連れて、寢所にこそは入り給ふ。跡を見送る 姪ども、「何とおいや聞きやつたか。御家老のおかもじは又格別、いかな奥様も理詰には是非がない」「チ、夫いの、いかな事覗かしもなされぬ御寢所、難病とは何ぞいの」「ハテ今いうてござつた怪しい影が映るといふは、女御様のお頭が鹿の首に映つて、股の有る角が兩方へ、かうしやつきりと立つといの。まだ其上に産子の和子、逞しいよい子ぢやが、夜に成るとおぎやアくと泣き続け、あの様に夜がな夜びと泣かしやるのは、犬にならしやる下地ぢや」と、いへばおいやが、「ソリヤなぞに」「ハテ母御様はあの通り生きながら鹿に成つてござるぢやないか」「ホンニさうぢや」と口々に笑ふ、後へ立出づる、若倉が思案顔、池殿御前も續いて出で、「何と若倉、是まで傍へやらぬ譯、とつくり

と見やつたの」「いやモウお道理でござります。したが、今宵のお伽は、此若倉が致しませう」
「ムンすりやまだ疑が晴れぬかや」「イ、エ左様ではござりませぬ」と、云ひつゝ立つてお次に向
ひ、「若倉が供の者、其箱持て」と呼ぶ聲に、あいと出でくる娘が、一ツの箱を直し置く。「モウ用
はない、歸れく」と追歸し、ふた押明けて取出すは、ゑほし狩衣。「是は是、忠盛様守護の間
召されたる装束、夫藏人を以て仰せ越されし其仔細は、すべて産家に先例有り、男子ならば桑
の弓に蓬の矢を矧け、障碍を拂ふ事故實なり。忠盛様にも、藏人も法皇様の守護に參れば、汝か
はつて其役を勤めよとの御仰、女ながらも忠盛様の御名代、今宵の直宿は此装束。ナア申し、是で
もお伽は成るまいか」と、辯舌さつぱり申せしは、實藏人が女房なり。池殿も點き給ひ、「夫の仰
と有るからは、何しに違背の有るべきぞ。寢所の次の廊下口、小座敷が直宿の座」「然らば左様」
と狩衣をほし、小太刀も腰に指足の、お次をさして入る折節、「多熊法眼様御出なり」と取りつが
せ、醫術に眼光らす頭殘切髪、願先へのつかく、進むる席に大あぐら、池殿御前慇懃に、「コレ
ハく御苦勞様。ソレ煙草盆お茶上げい」と、纏し有れば多熊法眼、「シテく女御の御容體、別
條は御さないか」と、胸の挨拶吞込む御臺、「ヤア婢ども、圍の爐に炭ついでおけ。衣江は襦袢の
役ではないか。おらんはお乳に氣を付けよ」と、人を除けるは密談と、皆々立つて入りにけり。法

眼邊見廻して、「新參の若黨やい、藥箱是へく」ナイくく「内玄關の切戸の庭へ入來る奴の彌正平が、菖蒲草のぶつさき羽織、仕きせの大小藥研鑊、銀金具の藥箱、縁先にかつよくばふ。夫とみだいも不審顔、「あの者は、きのふ慥に」「ア、成程く、六角堂にゐた一文奴、中々力量の者なれば、召抱へて斯くの通り。ヤイもう用はない、玄關に扣へておれさ」「ナイくナイ」切戸の口にめめば、「イヤサ密に談する仔細有れば、御前にも人を除け召された。用有らばこちから呼ぶ、罷立てく」ナイくく「切戸の外へ立出でしが立留り、「アノ御臺様は、きのふ慥に草履を賣つて覺えた顔。ム、く何にもせよ女中ばかりの此館、身が旦那も療治にかこ付け、女性と二人指向ひ、ハ、ハ、ハ、どうでもコリヤ色事に極つた」と、つぶやきく出でて行く。池殿御前小聲になり、「きのふ途中で申した通り、女御の姿の異形の體、血の上の胸りで、氣を取失ふか、目でも廻かと思ひの外、けふで六日になるけれど、何の驗も見えぬ故、心をせくは外でもない、三十三間堂棟上も早今日、忠盛が歸られて、此事を知らせては、折角仕込んだ心づくしも水の泡、けふの日に殺す思案、頼んで置いた毒藥は」「シイ、成程く調査して參つた、則是に」と取り出す包。「此祕藥の奇妙といふは、男に吞ませば目鼻口から血を吐く、女には幸究竟、彼月の不淨のおりる如く、人知れずに命を取る。幸ひ爰に藥の風呂」水の加

滅も法眼が、手づから仕かける火をおこす、扇の風も六天の、魔風を爰に吹立つる、毒藥とこそ知られたり。法眼が仕濟し顔、「大切な祕藥の料、金子百兩引かへの約束、お渡し有れ」といふ内に、池殿は手箱より包取出し傍に置き、「イヤなう法眼殿、疑ふではなけれども、假初ながら女御の命、生きる死ぬるの大事の場、慥な證據が有るかいの」「エイ何と」「サア忽ち命を取るといふ、慥な事が見たいはいの」「ハテ疑の深いお方、女御の姿をあのごとく、鹿の影に映したも我祕方、眼前慥な證據でないか。煎じかけた此藥、早う吞して」「サア其試が見たいといふ事」「ム、然らば奴どもか」「イヤく、夫では結句傍輩同士、女御に洩れては猶大事」「ハテどうがな」と法眼が、「ム、夫よく、新參の若黨め、さうぢやく」と打點き、「彌正平參れ」「ナイナイく、御用いかど」と蹲る。「呼立すは別儀でない、無心が有る聞いてくれうか」「ハア、こは改つた御詞、無心とはいか様な儀でござります」「イヤ外でもない、爰にコレ煎じた藥が有る、汝是を吞んでくれ」「エイ、私めはどしも悪うはござりませぬ」「イヤサ主従と成るからは、主人が用に立てん爲さ」「左様ではござれども、篤と様子を聞かない内は、めつたに藥は」「ムン尤」と包みし黃金投げ出し、「夫で吞め」エ、と取上げ、「コリヤ金さうにござります、是で吞めとの仔細はどうでござります」「ヲ、サく此藥は家の祕方、汝が如き力量有る者に吞ますれば、

忽に力も落ち、燈心（とうしん）を持つ力もない、又力量なき者が吞めば大力と成るによつて、是なる池殿御前、劔術（けんじゆつ）を好み給へども、高が女性（にょせう）のかよわき體、力量の増す様にと勸むる藥、試（こころみ）なくては吞むまじと有るによつて、指詰（さしづめ）汝へ身が無心、則褒美（ほうび）の金子百兩、汝が力をあなたへ譲る忠義の藥、早くく」と法眼が、偽り飾る詞の端、彌正平も當惑（たうわく）し、「何ほ左様御意（ごい）なされても、能く思うても御らうじませ、生れながらの中風（ちゆうふう）はしらず、男と生れて力がなくては」「サアくそこちやて、力がなくても其金を、身に付けなば一生は安樂（あんらく）、此法眼藥を盛り、人を助くるが醫者の役、汝が爲に悪い事を勸めうか、ぜひに吞め、早く吞め」「アレまだおつしやる、神佛（かみほとけ）に手を合せ、息災延命家内案全（そくさいえんめいかないあんぜん）と祈るは何の爲でござります。我人體（われひで）を達者（たつしや）にして、子孫（しそん）の榮（さかえ）をばふ身が、何ほ金（かね）がほしいとて、生れも付かぬ頑（がたは）と成り、骨なしに成る事は、御免々々」と逃出づる。法眼先に飛んでおり、切戸（きりど）の口に「どこへく、逃けるとて逃さうか。畏つたと吞めばよし、吞まぬと素頭押（そかうおし）へて吞ます。サアく夫（それ）でも」と立戻る。此方は御臺が長刀構へ、「吞まずば是（これ）に載（の）せうか」と、左右（さいう）を立切る錠鏢（ぢやうかきがね）、跡へも先へも彌正平が、地獄落し（ぢごくおとし）に合ひたる如く、遁（のが）る方もなかりしが、思案（しあん）極めて、「さうぢやく、成程藥吞みませう、が其藥は、力の落（お）ちるばかりぢや有るまひ、命も落ちるでござりませう」「何とく、扱（たちぎ）は様子を立聞いたな」「ア、いやく、

何にも聞きは致さねども、斯く手詰に成るからは、得心でたべませう」「チ、出かした、逆も免さぬ儕が命、有りやうは毒藥ぢやはい」「エイ」「チ恠り仕やるは理、コレよう聞いてたも、殺さにやならぬ人が有る故、調へた此毒藥、試にどうぞ呑んでたも、コレ自が頼んだぞや。若しも親兄弟妻や子でも有るならば、死にやつた跡で自が、念比に届けてやらう。彌正平、そなたの命百兩に買うたぞや。サア早う呑んでたもいの」「アこれ申し、大切な人の命、澤山さうに、雜魚鰯か何ぞの様に、藥を呑むと忽ち死にます、死んだ骸に千萬兩の金貰うて、何の役に立ちまする。届けてやらうとおつしやつても親はなし、女房がなければ子は元より。併し兄弟がたつた一人、夫も幼少で別れたれば、顔も知らず有所も知れず、心がかりは夫ばかり。此様に二本ざしに成つたも、漸ときのおふから。すかんぴんな一文奴、面を晒すも命が惜しさでござります。哀不憫と思召し、毒藥を呑む事は、御赦されて下さりませ。見ますれば此様な、結構な御殿造のお長者様、申しくと手を合せ、「旦那様、法眼様」と手を摺つて、拜んで廻る男泣、目からこぼるゝあら涙、白洲は蜂の巢をなせり。法眼がむつと顔、「猶豫する程付上る胸張者め。御前には其長刀、生殺しにしてくらはす工面」「チ、隙取つては妨ぞ」と、かい込む長刀刃向になし、ひらりと薙ぐればきりりとかはし、「こりやどうでも吞ます所存でござりますな」「おんでもない事、叶はぬく。大

事を知らせて助けうか」と、打ふる長刀かい掴み、「フ、、、ハ、、、、美しい器量をして、人を殺す毒藥とは、どうしても是は悋氣の沙汰、聞いた者はおればかり、人が知つたら免さうか」と、いはれて御臺もたまりかね、「モウ遁さぬ」と引たくり、切込む長刀たぐつて取り、石突丁ど急所の當身、御臺は跡へたぢく、「コハ狼藉」と法眼が、するりと抜いて切りつくる。「まつかせ」沈んで素股させ、同じく石突眞の當、ウンとのつけに反返る、手練の程ぞ心地よき。されども騒がぬ彌正平が、茶碗に茶をうつし入れ、庭に伸つたる法眼が、體へぐつと活を入れ、「コレ」親方氣が付いたか、息つぎに茶を一つと、渡せば取つて押戴き、「どなたかは過分々々」と、呑込む毒茶息する内、こなたに轉ぶ御臺の傍、脈取つて見つ足の脈、つくぐ考へ打點き、抱起して死活のさそく、むつくと起きたる池殿御前、落ちたる長刀取直し、「彌正平やらぬ」と討つてくる、刃先を潜つてしつかと取り、「御臺所急くまい」。望の毒藥試見せう「ムンそりや誰を」「ハテ誰というたらソレ其處に」と、ひやうまづいたる詞の下、法眼が白眼。「よつく身どもを當てたよな、イデ毒藥を」と立寄る目先、鍋を突き付けさし付けて、「此中には半もない」「ヤア無いとはいかに」と惘れる顔、打ながめて高笑ひ「息次に茶というて、呑したを忘れたか」「ヤアくく、主に毒を呑したとは憎い奴」と、睨んで見てもびくともせず、

「かう成るからは此方から縁切つて、主でない家來でない、證據は爰に、コレきのふ仕た身が證文、當身の間に著服した。ほしくは冥途の土産にせい」と、ずん／＼に引きさき／＼打付けられ、「重々儕」と立上る、足元ひよろ／＼、臍腰まで、忽ち廻る毒藥の、驗は目口に血を吐いて、七轉八倒のた打つ有様、己が手盛の鳩毒に、報いの程ぞ醜し。池殿御前も醜しながら、心に黠く安堵の思ひ。彌正平すつと立寄つて、とどめをぐつと足の先、落ちたる包を拾ひ上げ、みだいの傍に直し置き、「驚き入つたる毒の試、最早ちつとも氣遣なし。残つた藥を煎じかけ、嫉妬のほむらは只一ぶく、女御の命、ナ」「ム、スリヤ様子は」「残らず聞いた、お前の味方、合點か」「チ、嬉しい／＼。そんならやつぱり此金は、毒藥の價の金、彌正平そなたへ褒美にやる」「ハハハ、法眼が大欲頼、人に洩すまじと思召さうが、此上に十倍倍金の山をつみ、法眼を詮議せば、其金に目がくれ、白狀するは知れた事、そこへ心の付かぬが女性。最前より見届けた、お前の性根に見所有り、今より彌味方して、本望の後楯、命を的に懸ける仕業、金貰うて何にせう。慮外ながら男でえす、金で頼れる様な魂でござんせぬ。褒美もいらぬ金もいや、そつちへ取つて置かしやませ」と、口も心もさつぱりと、實一疋の男なり。みだいも力を得給ふ風情、「頼もし／＼、彌頼み頼まるよ、證據が見たい」と詞詰、「チ、尤、互に心を合すといふ、印

の金打まつかう」と、刀かたなするりと抜き持つて、長刀の刃にちやうくく。「チ、忝おちづい落付きま
 した。かう成る上は何をか包つまん、あの祇園女御の身の上、勅説とはいひながら、妬ねたましい其上
 に、男子なんしまで出来たれば、彌しん暎る恚いが燃え返る。心をせくは夫そとの留守、一刻も早う取殺とりころす、思案しあん
 はかう」と、呬きく點うなづく庭の草、露も洩もらさぬ密事みつじと密事。若し毒藥で仕損しそんぜば、彌正平が段平針、
 肝先へ一思ひとおもひ」「成程く、女御が寢所の廊下へは、其切戸より左の方、出合所は築山の、桤もみぢ
 庭」とゆふ暮方、土圭さけいの六つもせはしなく、「必待つぞや」「合點がつてん」と、別れてこそは三重桤葉もみぢはの、
 風に散りくる色見れば、物思ふ人の胸の火か、焦こがれ出づるぞ恐ろしや。暎恚しんるのほむらいや増
 しに、消えもやらぬか池殿御前、執念しゆねき心穂に出づる、麥むぎ藁わら笠がさを眉まゆ深く、手に持つ油さしそへ
 て、いとど思おもひを焦こせとや、おどす姿は我獨われひとり、外には人もしろ小袖、心の劔つるぎとぎ立てて、女御
 親子を目の前に、取殺さいで置くべきかと、夕闇照ゆふやみす燈籠とうろうの、火かけに映うつす我形わがたち、女とも見え
 又男とも、見えつ隠れつ御寢所ごしんじょの、廊下ろうかの庭にはにをりもよく、誰も木立こたちの築山つきやま傳つたひ、忍しのび入るこ
 そ怪あやしけれ。直宿さのふ守る身は油斷ゆだんなく、始終しじうを窺うかがふ若倉わかくらが、ゑほし狩衣かりぎぬ引きまとひ、心も細太刀
 脛はざ高く、したひ寄るともしら洲すの庭には、「曲者くせものやらぬ」と引き留めたり。此方こなたも念力強氣がうきの姿すがた、寢
 所じょをさして行かんとする、猶組み留める後抱うしろだき、「放せ」「放さじ」罵ののかつら、風にもまると風情な

り。漸やうくにふり放し、廊下らうかを目がけ駈出かけだせば、「どつこいどつこい」と引戻し、笠かなぐりて顔と顔、
「ヤアみだい様か」「若倉か」「エ、お前様はく大それた此お姿、今宵は私が直宿と知りつゝ耽は
ちもせず、悋氣嫉妬りんきしつどの心から、女御様のあの様な、怪しい影も合點あてんがいた。剩さへ親子御共お
命を斷たたんとは、夫程にまで憎にくいかえ。夜晝よるひるともした燈明へ、油をつぐのにマア仰山ぎやうさんな此出
立、おどしの正體見付けたから、此水瓶の油さし、こつちへおこし」と取らんとする。「イヤイ
ヤく渡さじ」と、隠す袂は蝶の羽か、取らんとする狩衣の、袖は牡丹の花競べ、互にせり
合ふ其内に、ぱつたり落ちたる水瓶の、油は残らずなむ三寶。「モウ赦さぬ」と隠かくせし刃、「若倉
やらぬ」と切付けた。心得受けたも鞆ながら、打てば拂ひ、なぐれば受ける、後妻打、あしら
ひ兼ねたる刀の鞘、打つは鐵杖劍の筈、二ツの鏢音ちりりんく、悋氣かうじて茜さす、顔の
照葉や紅白粉、亂るゝかもじ鬢の香の、梅花にあらぬ紅葉の庭、二正連れたる獅子奮迅、花踏
みちらす如くにて、疼ます去らず打ちあふ刃音、行くも止めるも姫ござどし、支へるこなたは
弱弓の、おくて跡へたぢくく。「コレくくく御臺様、此装束は忠盛様のゑほし狩衣、夫
に敵たふ心ぢやな」「ヲ、夫忠盛殿、女御に我を見かへしつらさ。女御が無くばと思ふより、瞋
恚の燃ゆる度々に、胸が裂ける腹が立つ。そこ退け若倉、退くまいか」「イエくくく、かやう

な事もあらんかと、忠盛様の仰を受け、直宿申す此若倉、微塵も爰は動かぬく」「チ、動かすばまつかう」と、又切付くるを受留むる、鞘は碎けて飛びちつたり。「申しく、お主に手向ひせぬ印、今まで鞘であしらうた、私が心を推量し、本心に成つてたべ。頼み上げます御臺様」「イヤくく意見立聞かぬく」とゆふ暮暗き嫉妬の念、こなたは止める忠義の道、果しなければ聲を上げ、「彌正平はいづくに在る、出合へく」の聲の下、「まつかせ是に」と走り出で、支へる若倉かい掴み、二三間投退けたり。「サアく邪魔は拂うた」と、いふより早く刀追取り、みだいの脇腹ぐつと一突。わつとばかりに玉ぎりながら、「取違へたか狼狽へたか、自を何故に」と、苦しみ給ふを耳にもかけず、ゑぐれば傍に若倉が、「思ひがけなき此有様、彌正平とは何者で、みだいを手込になしけるぞ」と、いぶかるも又道理なる。「ホ若倉殿の御不審尤。我身の上を一々次第、語つて聞けんよく聞け」と、手負を突きやりどつかと坐し、「コリヤ池殿、味方顔した此彌正平は、現在そちが兄ぢやはい。ホ、悔りは理、元來某は南部春日の社人、三笠兵衛宗久が甥。親にて候ふ宗久、妹が生立、器量も勝れて見えながら、一つの疵は右の足、裏にありく鱗の痣。元來父は神職なれば、未然を察する妹が生立、父母一所に育てては、必ず親に崇るといふ、詞の内に先立つ母。扱こそと驚きて、捨てねばならぬ品と成る。さ

はいへ親の不便さ餘り、とても生立つものならば、立身出世の相も有り、都の内に捨てんと、此王城に來られしが、比は大内節會の夜、御溝水の其邊に、捨歸りしとの物語。此兄も其比は、辨へなければ不便とも、悲しいとも思はざりしが、成人するに従うて、弓馬の道を心がけ、武者修行に家を出で、當夏南都へ歸りしに、何者の所爲にや、父の兵衛を刺殺し、家に預り大事にせし、千年劫ふる白鹿、奪取られしと家來が噂。顔も知らず名も知らず、申譯も立たざれば、三笠の家は没收に遭ひ、夫より所を立退いて、何卒敵も見出さん。又幼少で別れた妹、存命で居るならば、築地の邊へ捨てたとの、父が詞を思ひ出し、一文奴の鎧振りして、内裏上臈と見る度に、女草履の突付賣、願望の譯有りとして、拙者が手づから履かせしは、幾千人といふ中に、昨日六角堂の我門前、乗物へ草履を突付け、足の裏を見た時に、扱こそ尋ぬる妹ぢやと、思へど夫と名乗もならず、ア、儘よ、折もあらんと思ふ中、あの法眼に抱へられしは究竟一、此館へ來て顔見た時、父の最期も語らんと、折を窺ふ無道の法眼、嫉妬の相槌毒藥まで、工の臍をこつちから、味方したはコリヤ妹、とて變もせぬ嫉妬の恨、見遁しならぬ今夜の時宜、ぜひに及ばず此有様。親には捨てられけふの今、廻り逢うたる兄妹、名乗らぬ先に殺すといふ、是もやつぱり因縁か」と、語る内にも目にたもつ涙ぞ、眞身の印なる。傍に様子を若倉が、「扱は誠

の妹御か。コレ申し御臺様、お心はいかゞぞ」と、始の恨今更に、涙もろきは女同士。池殿は苦しさも、血筋の兄の物語、「思ひ合はする事有り」と、若倉が介抱に、漸と起直り、「扱は誠の兄上かや、自が假の父、大炊三位有教卿、今はの時の遺言に、内裏に節會の有りし夜、御溝の池の邊にて、拾ひたる其方なれば、所を直に池殿と、付けたりととの物語。誠の父は奈良の里三笠兵衛様で有つたか。ハア、悲しやコレ兄様。誠親の敵といふは、此妹でござんすはいなう」「ヤア、くく、父兵衛殿は何故に、其方が手にかけてしぞ、仔細いかに」とせいたる顔色。「テ、驚は尤でござんする。様子語るも恥しながら、自といふ妻有る上、忠盛殿の武勇を感じ、白河法皇より、祇園女御を給はりて、一つ枕の閨の内、始の程は中々に、悋氣妬もなかりしに、二月立ち三月立ち、早五月のいはた帶、自が生得に、常々から物妬、生れつきとは氣も付いて、必ず女の嗜事、思ふまいと思ふ程、いや増しまさる胸のほむら、焚付ける多熊法眼、女御を殺すはよい術、三笠兵衛が預る鹿、千年過ぎた男鹿なれば、其油をしほり取り、空青石の水を以て、彼が祕方と調合して掲けし燈明、清水の觀世音を祈ると偽り、夜晝産家に灯せしより、女御の影は忽に、鹿の頭に映りしぞや。まだ其上に産子まで、夜泣の魘も其業かと、悦ぶ此身は欲界の魔王に等き今此形。源義親が祇園の社へ忍びの姿、遠目に鬼と見えたるよし、忠盛殿の噂にて、聞

き覺えたる此出立。實物うしの時まうで、人を呪咀へば身に報う、此苦も覺悟の前。兄上赦して下され」と、有りし次第をつとくに、聞くより彌正平、「コリヤく妹、其鹿こそ親人が、預り給ふを能く知つて、父を討つたは法眼よな。思はず知らず毒藥で、敵を取つたは父兵衛が、手引なされたものでがな。忝い有りがたい。さりながら、藥の上から捨てられても、やつぱり産の親人に祟をなし、法眼に討たせたる、元は現在我妹。現在兄が手にかけて、妹を討つも因縁づく。毒蛇の鱗の痣有れば、嫉妬の災有るべしと、見付ける親も妹も、因果の因縁なりけり」と、不便さ増る目に涙。若倉も打しをれ、「いかに嫉妬なればとて、親御といひ其身まで、ひよんな最期の此有様、懺悔に罪を滅すれば、未來は成佛し給へ」と、いへども御臺は、「いやくいや、此身此儘死ぬからは、生きかはり死にかはり、女御親子を取殺し、安穩でおかうか」と、怨念凝つたる其かんばせ、柩をちらすごとくなり。彌正平猶も齒がみをなし、「因果の道理を聞かしても、いまだ發起の心はないか。コリヤく妹、祇園女御の胎内より、出生の縁子は、白河法皇の、御胤なりと世の風聞。かほどの事を辨へぬも、輪廻に心の暗む故、先立つた親々まで、地獄へ導く不孝者、エ、見下け果てたる其根性、最早此世の暇をくれん」と、突込む刀に手をかけて、互に見合す顔と顔、思へば不便と手もなまり、「一筋な心から、慍氣も出づる嫉妬

も起る、鱗の痣は惡龍が、此世へ生れて妹と成り、人を殺すの呪咀ふのと、目の前鬼を兄弟に、持つたる兄も過去生の、報いか罰か浅ましや」と、人目も恥ぢぬ恩愛の、血筋の涙ぞ道理なる。漸涙の目を拂ひ、「ハッアさうぢや誤つたり。逆も斯くても助けぬ命、觀念せよ」とふり上ぐる、其手にする若倉が、「待つてく」と留むるにぞ、「イヤくく放されよ」と、争ひ果しなき所へ、「暫ざふ」と聲をかけ、備前守平忠盛、法皇を供奉し參らせ、悠々然と入り給ひ、「いかに方々承はれ。三十三間堂御棟上の規式より、頭痛の御惱も全快にまします間、恐悦に存じ奉れ。忝くも法皇此館に遷幸なる事、女御の異例産子が夜泣に、叡慮を苦しめ給ふ餘り、我ともいぶかしく、若倉を直宿にいひ付け、密に歸つて見届けたり。彌正平が忠節御臺が愚癡、誠や内心夜叉に譬へたる、佛の誠目前なり。迷ひを晴せよ池殿」と、忠盛の詞の内、しづしづと法皇は、寢所の方に入御成り給ひ、うつる障子のうちとけぬ、女御は衣を身に覆ひ、恥しぶりの御風情、「いかにや女御」と召されつゝ、邊輝く燈明に、立寄給ふ法皇の、影はありくく小男鹿の、女御を始めお傍の女中、「こはくふしぎ」と立寄る忠盛、映る男鹿の影ほうし、希代なりける妙術やと、在合ふ人々一同に、鞅けて詞なかりしが、忠盛驕がす扇を開き、打消す光一時に、像は消えて誰々も、今ぞ不審は晴れにけり。折しもむづかる産子の夜泣、秘達が取

取に、いぶりすかせど彌増すおびえ、法皇御衣に抱上げ、「夜泣すと、たどもり立てよ縁子は、清く盛ふる事もこそ有れ」と、一首の御製の奇特にや、夜泣は忽靜まりけり。忠盛ハツト恐れ入り、水子を抱へ立上り、「全く君の聖德に、夜泣も納る歌の德、立入り給ふ下の句の、清く盛の文字を取り、名を清盛と改めて、忠盛が家督となし、忠孝怠る事なかれ」と、育て上げたる平家の芽出し、大政大臣正一位平朝臣清盛とて、官職上なき繁昌は、此稚子の生立なり。法皇御感淺からず、「祇園女御が不例といふも、池殿御前が一筋の、道を守る心より、嫉妬の念も理なり。たとへ死すとも彼が名を女御に譲り、祇園女御を今よりは、池殿御前と呼ぶならば、兩人ともに添ふ心、恨を晴れよ池殿」と、いとも賢き勅、皆々アツト平伏の、中に忠盛頭を下け、「世に有りがたき院宣に、何か遺恨の残るべき。兄弟が亡父は、三笠兵衛宗久とや、彌正平とてもつながる縁、彌平家に仕ふといふ、心を以て今日より、彌平兵衛宗清と改名し、清盛がめのとと成り、池殿と名を残す女御が傳、心得たるか」「ハ、くくく重々厚き御恵、コレく妹聞いたるか」と、問へばにつこと打笑みて、物いひたけに手を合せ、夕の露と消え果てたり。法皇重ねて、「いかに宗清、唐土には楚の元王、雲夢の地に獵し給ひ、鹿の塚を築かせて、白鹿窟と號けし例、妹が亡骸は、鹿の油と諸共に、清水寺の邊りに葬り、鹿間塚と名に呼ば

ば、彌成佛得脱せん」と、勅諭有れば悦ぶ宗清、君も還御の御催し、供奉は忠盛警蹕の、御先を拂ふ武將の役、彌平兵衛宗清は、妹が亡骸清水寺へ、送り營む鹿間塚、庭のてり葉もちりぢりに、ちるや紅葉の八重九重、錦をかざる産衣の、祇園女御の名もかへて、爰池殿の六波羅に、育つ水子の夜泣まで、納る歌の御威徳、家督の若子を若倉が、抱きかゝへて、ねんくころろ、いとし殿よ花やろ、花の都の輦に、たどもり立てよ末の代に、清く盛ゆる因縁謂は、コレこのくくくく此若君と、仰がぬ人こそなかりけり。

第五

秦の徐福が口ずさみ、奇異の深山といひ初めて、紀伊と號けし國の中、牟婁の郡の御社、三所権現と崇め奉り、歩を運ぶ靈地なり。白河法皇御參籠の御供には、横會根平太郎當吉、一子縁丸諸共に、證城殿の階の本、通夜を申しの年籠り、信心深き夜もすがら、眠催す肱枕、夢の告をやまつの戸の、御帳開くと覺しくて、神童顯れ出で給ひ、いとも妙なる御聲を上げ、「いかにや法皇しろし召せ、御身頭風の惱により、三所に歩を運ばれし奇特によつて、告けしらしめたる一字の堂、觀世音の靈地に准へ、卅三間堂落慶に及びしより、病平癒の悦び善哉。平太郎

には權現直に御示しあらんと、のたまふ聲は神勅の、金剛童子の其姿、扉の内に入るよと見えし眠の夢、法皇御目を開き給ひ、正しく病も、いつしかに、御心涼しく見え給へば、平太郎もふしぎの思ひ、信心肝に銘じつゝ、猶神託を待つ所に、異香妙なる御帳の内、權現の御姿コハいかに、け高き僧形忽然と、階三段おり立ち給ひ、「いかに平太郎承はれ、汝孝心淺からず、年比爰に歩を運び、神を敬ふ正直心、渴する者には食をあたへ、田邊の濱の路頭にて、水に溺れ死したる者、其尸を葬り隠し、穢不淨を忌嫌はず、慈悲萬行の施は、則菩薩の行といふ、口に稱名怠らず、不斷念佛する事も、誠の心有る故なり。其恩德を報ぜん」と、忝くも御頭を低れ、三度禮拜なし給へば、平太郎親子は身を打伏し、忝なみだと感涙に、すさつて九拜なしにけり。御佛重ねて宣はく、「我は是本宮の神體、伊弉冊命の垂跡、本地あみだ如來なり。濁世の凡夫を救はん爲、一字の堂の棟とせし、柳は楊柳觀世音、假に化現の像となし、汝が妻女と身を變じ、まうけたる緣丸、彼が成長の時を待ち、惟時人皇八十代、承安三年の比に至らば、月の輪の禪定兼實、六角堂救世菩薩に告子の祈誓を待ち、我其時親羅丸と生出で、念佛の行者と成り、一向專修の眞宗を、普く此土に弘めん時、一子緣丸に名を譲り、平太郎と改名せよ。親羅丸が弟子となし、法號は眞佛房と名を呼んで、國々行脚に召連れて、念佛門を弘めなば、

濁惡愚癡の尼入道、凡俗男女を導きて、一向専修に入れん事、他力本願佛の威力、歸命無量なむ不可思議、稱名をだに悦ばよ、忽九品蓮臺に、其身其儘坐せん事、何疑ひの有るべきぞ。誠や十劫正覺の、如來の誓願あらたなる、是ぞ佛の六神通、未來は本宮阿彌陀の本地、一子が出世を待つべし」と、のたまふ御聲と諸共に、僧形忽金色身、後光は四十八願の、光を放ち目前に、彌陀の印相お眞向の、尊容ありく拜まれ給ふは、有りがたかりける像なり。法皇始め平太郎親子、佛意に叶ふ有りがた涙、扱こそ時代押移り、月の輪兼實公、六角堂に告子して、誕生まします阿彌陀の化身、一向門徒の御開山、親羅聖人と崇め奉る。末世の衆生を救はせ給ふ、悲願の程ぞ有りがたし。猶も信心いやましに、法皇合掌渴仰有れば、平太郎親子は、同音に、「なむあみだ佛く」六字十字の名號に、現世未來過去遠々、助け給へる報恩講、朝時日中お初夜の勤行、末世に榮える本願寺、あみだの血脈退轉なく、後五百年の末法有縁、草木國土皆成佛、音樂響き花ふりて、和光の神體ありくと、夢か現かしら幣、神は上らせ給ふと見えし、眠の夢は覺めにけり。頭風山平愈寺蓮花王院、卅三間堂事故なく成就し、法事の舞樂と納りて、法皇褥に御安座有れば、院參の公卿達、列を正して伺候有る。法皇夢の心地もさめ、「平太郎はいづくに有る、参れく」と勅り、はつと答へて横會根親子、衣紋繕ひ立出でて、御

階の本に畏る。法皇御聲さわやかに、「只今眞睡む正夢の、所は熊野證誠殿、汝親子を召連れて、節分の夜の年籠、通夜を申すと見し中に、羨しきは汝等親子、權現直の禮拜は、佛意に叶ふ冥加の我達、取分けて、其子随分大事に守り立て、成人の後普く一向宗門を弘めんと、神勅。朕も病苦を遁れし悦び、彌佛心怠るな」と、勅詔有れば、平太郎、「コハふしぎなる御夢かな、某も暫が程、まどろむ中の夢の告、割符を合せし勅、此勅が成長まで、未然を察する御示現。是も偏に權現の、守らせ給ふ有りがたさよ。コリヤく縁よ、随分早う大うなれ、平太郎といふ名を譲るぞよ」と、云聞かすれば打點き、「コレとと様、わしも夢を見たはいなう。大きう成つたら、親羅聖人様とやら、此おれを弟子にして、日本國へ門徒を弘め、念佛を勧むれば、惡人は皆佛に成るけな。南無あみだ佛く」と、いたいけに手を合するもふしぎのふしぎ。法皇始め一座の諸卿、誠に希代の稚子やと、皆感涙を催せり。かゝる折から備前守平忠盛、進藏人引連れて、庭上に頭を下け、「是なる平太郎當吉、先年親にて候ふ次官光當、北面の武士時澄が、手にかけて討つたる父が敵、何卒御免を蒙り、時澄を討つて父が遺恨を晴さん事、藏人を以て某への願ひ。元來時澄射藝の家に候へば、幸かな此御堂の縁において矢數を射させ、平太郎にも名乗合せ、本意を遂げさせ申し度御願に候ふ」と、奏聞有れば點かせ給ひ、「誠や時

澄は謀叛人季仲に心を合せし事聞及ぶ。平太郎は先祖より忠功厚き其上に、佛智に叶ひし者なれば、とも角も心に任せよ。藏人よきに計らふべし」と仰の内、「時澄は某が手の者を遣はせば、追付け是へ来るべし。平太郎殿には御用意」と、勸むる嬉しさ親子共、法皇に暇を乞ひ、藏人が案内に、悦びいさみ入る跡へ、貝鐘太鼓亂調に、響くと等しく冠者爲義、甲賀山の凱陣とて、勝色見する鎧の袖、季仲を高手に縛め引立て出で、「君の威光を頭に戴き、一戦に切摩け、御見参に入れ奉る」と、言上あれば、季仲無念の眼ざし、「奇怪至極」と睨んだばかり。忠盛勇んで、「お手柄く。繩付は此儘に、檢非違使の手に渡し、爲義の勳功は内裏の廳の御沙汰にあらん。先々休息然るべし」と、君も還御の御供と、忠盛が引添て、しづく還御成し給ふ。既に用意も辰の刻、北面の武者所、矢數の願相叶ひ、矢抱に弓を脇挟み、的は五寸の角を立て、射前に直つて始むれば、通矢仇矢は藏人が、床几にかより采追取り、當りくと知らせの聲、矢數も既に納りける。時分を窺ひ平太郎、弓矢携へつと出で、「ヤアく時澄、五年以前熊野において見遁し置いたる親の敵、横曾根次官が一子同苗當吉、尋常に勝負々々」と聲かくれば、「ヤア、瘦浪人が鎗矢を以て、敵討とは腹の皮。一筋残つた乙矢を取つて、胴腹を射ぬいてくれん」と、弓に矢矧けて、つつ立つたり。こなたも元より弓矢の家、一矢にたゞ中射貫かんと、同じ

く矢はけて立ち向ふ。御堂の扉内より開き、ぬつと出でたる縁丸、刀持つ手もかひなくしく、
狙固めし時澄が弦をはつしと切拂へば、「コハ何奴」と狼狽眼、弓取直す其隙に、飛びくる矢坪
は時澄が、胸板朱に射通され、どうと轉ぶを起しも立てず、親子一度に立ちかより、「父の敵」
「ぢい様の敵」「覺えたか」と、とどめをさしにも平太郎親子、天にも上る心地なり。引返して忠
盛公、藏人諸共「出來たく」。此由院へ奏聞せば、彌御感まします。いざ同道」と打連れて、
院參急ぐ横會根の、家の榮えや洛陽の、三十三間御堂の矢數、是を始めて今の世まで、通矢數
當りの矢數、萬々歳の弦かけて、納る矢こそめでたけれ。

祇園女御九重錦終